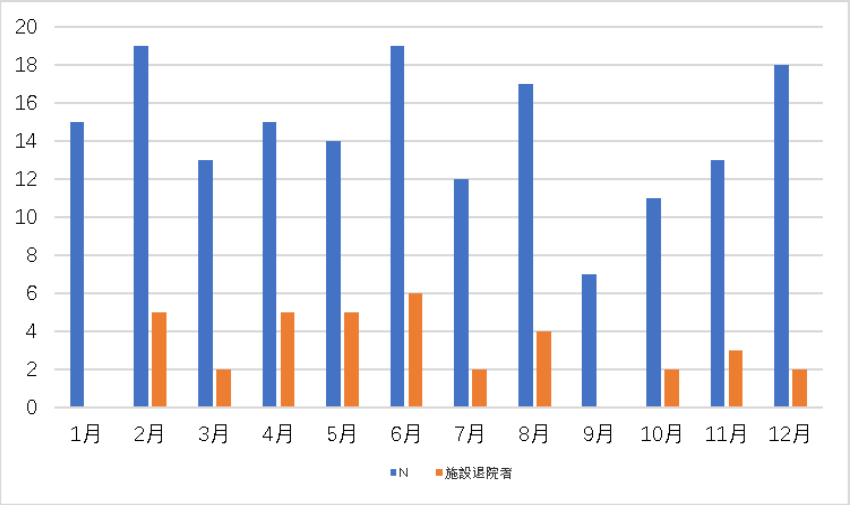
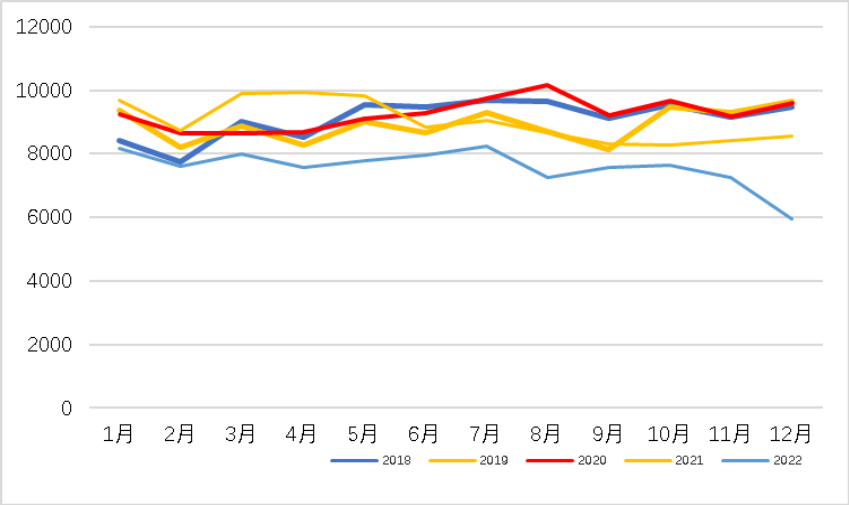
ニ） 在宅⇒施設（急性期病院退院は除く）



コメント
入院前の居場所としては、在宅、有料老人ホームが多く、元の在宅へ帰る割合は60%ほどで他の20%ほどは施設への調整となっている。高齢化や独居の割合も多い現状もあり、今後施設への退院調整割合が増える事も予想される。
それに伴い今後施設からの受け入れ数も増加傾向となる可能性もある。

ホ） 回復期総単位数

【目的】
ゲストを在宅復帰させる（もとの住み慣れた生活へ戻す）
回復期リハビリテーション病棟施設基準1の施設基準を遵守する
医療情勢の動向や地域のニーズに応じた病床機能であるかを検討する

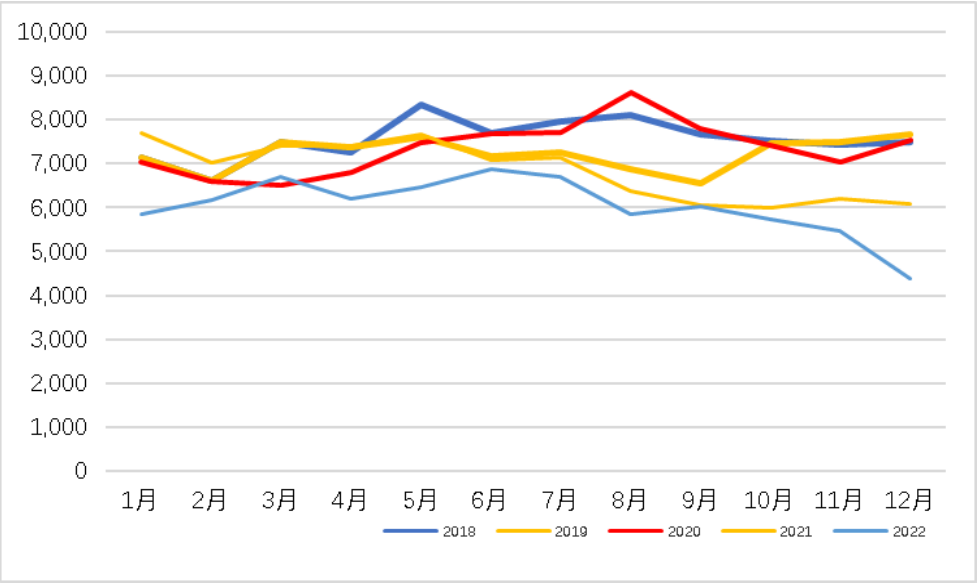


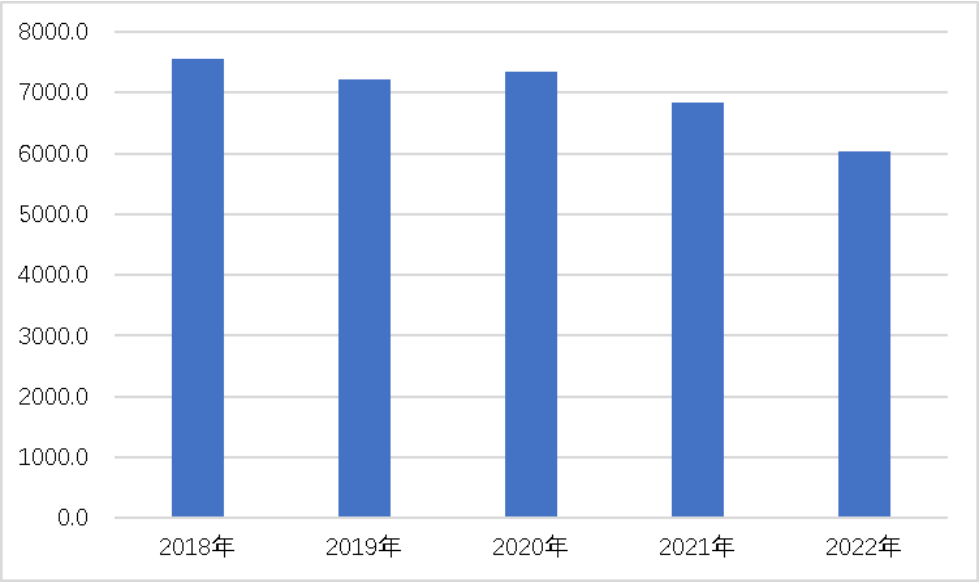
コメント
2022年1月から3月にかけて退職が続き、退職に対しての入職も1名と少ない状況であった。そのため年間を通しても4月の減少が目立った。また2022年12月は回復期入院者数が落ち込み総単位数も減少する形となった。

へ） 疾患別取得単位数

【目的】
ゲストを在宅復帰させる（もとの住み慣れた生活へ戻す）
回復期リハビリテーション病棟施設基準1の施設基準を遵守する
医療情勢の動向や地域のニーズに応じた病床機能であるかを検討する

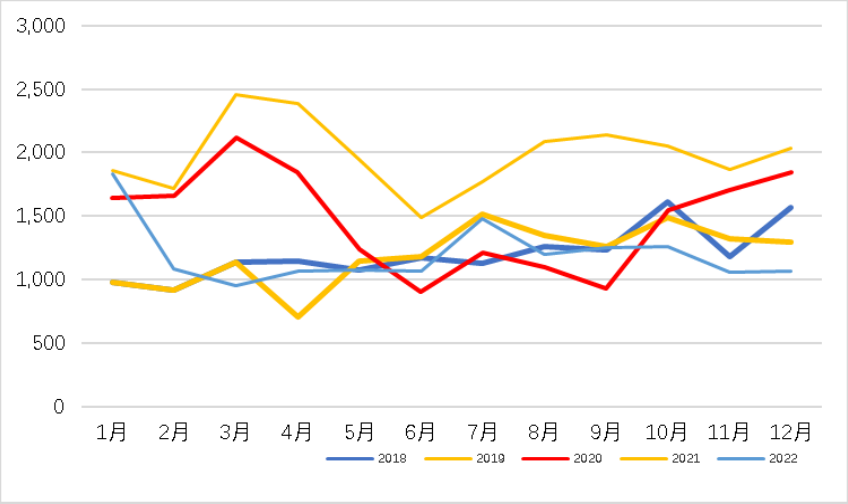
脳血管

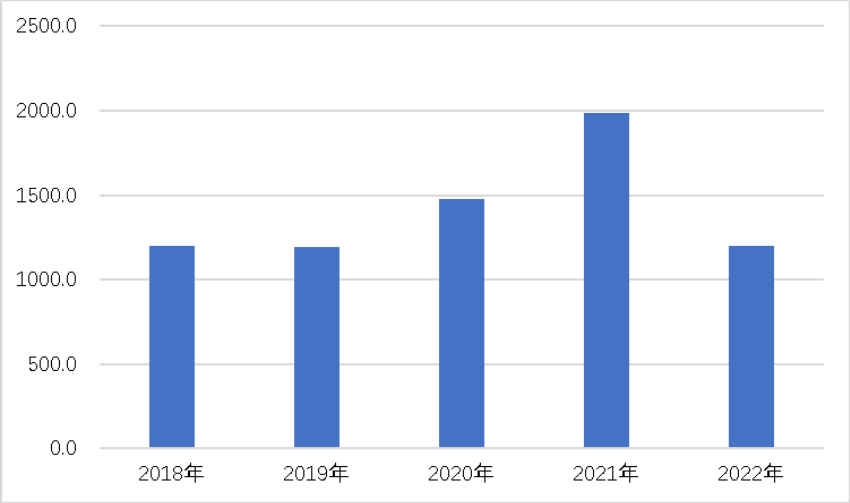




コメント
脳血管単位数は過去5年の経過を比較すると、減少傾向に向かっている。運動器・廃用症候群の割合が若干増加傾向である。

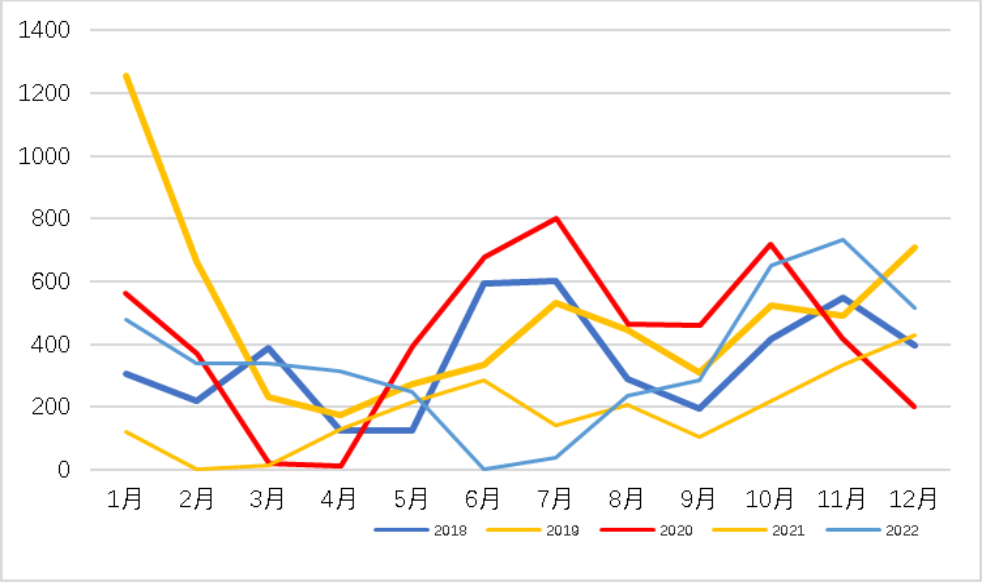
運動器

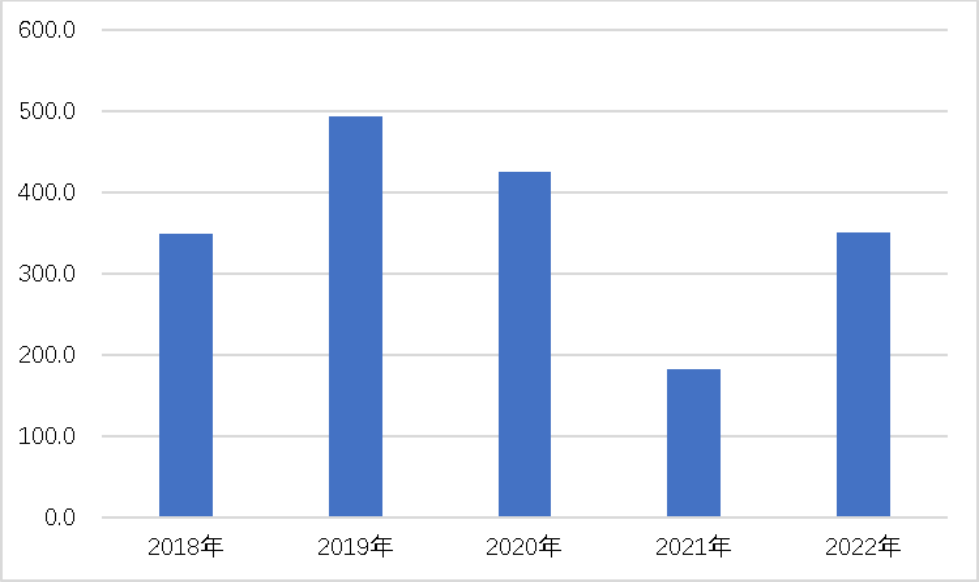




コメント
2022年の運動器疾患の割合は前年度と大きく変化はない。取得単位数は減少しているが、セラピスト数の減少も影響しているためと考える。近隣の整形外科病院からの圧迫骨折の紹介が多く回復期入棟している

廃用症候群

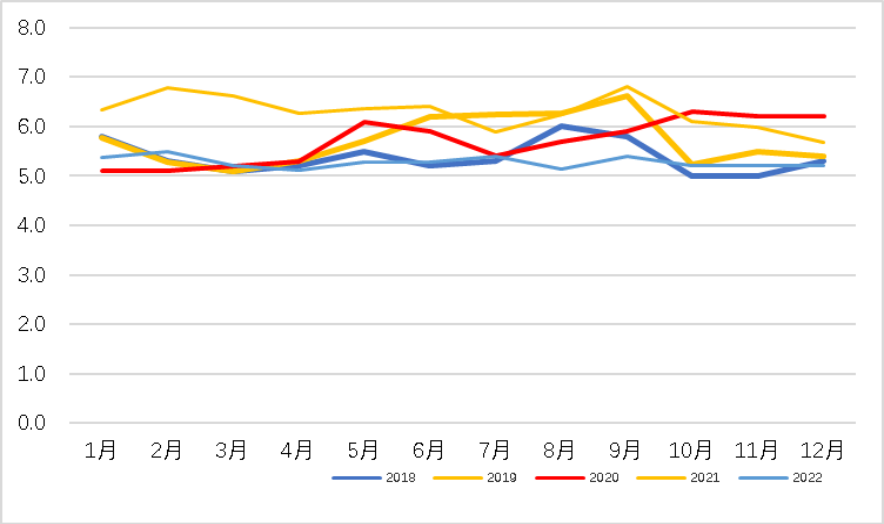




コメント
2022年の廃用症候群の割合は前年度よりも増加している。コロナウイルス感染後に肺炎を発症している症例もある事が影響している可能性が高いと考える。

ト）　一人当たり平均実施単位数

【目的】
ゲストを在宅復帰させる(もとの住み慣れた生活へ戻す)
回復期リハビリテーション病棟施設基準1の施設基準を遵守する
医療情勢の動向や地域のニーズに応じた病床機能であるかを検討する

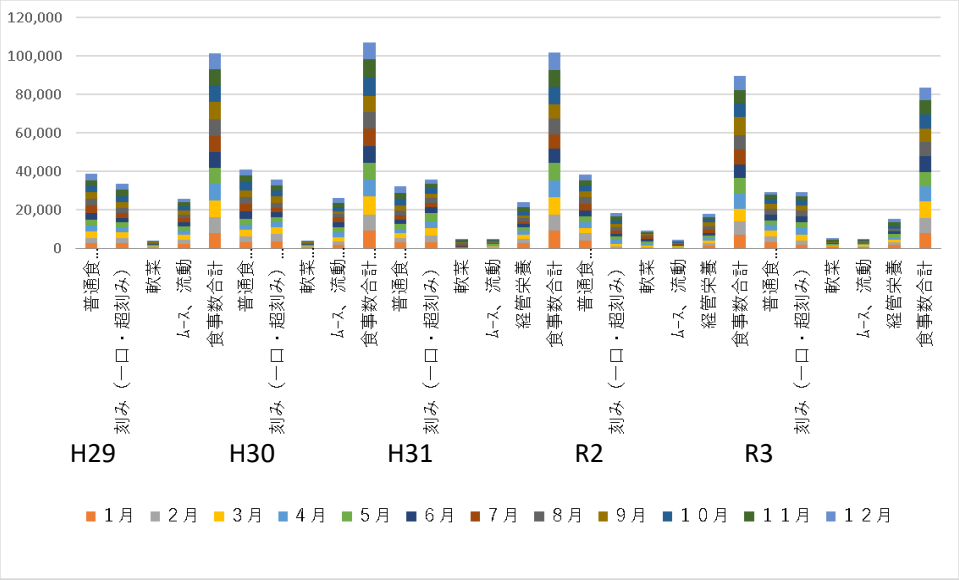


コメント
回復期病床数が2022年12月は当病棟がコロナクラスター発生し、入院受け入れに支障が出た。そのため平均入院数が37名と現象していた。そのため一人当たりの平均単位数は5.2単位と維持する事が出来ている。一人当たりの平均単位数は入院数にも大きく影響してくる。

8. 栄養　　栄養科　主任　五十嵐　豊

イ）　食事形態の推移

【目的】
重症度の高いゲストが普通食を食べることはほとんどない。つまり、食事形態層をしることはゲストの重症度に比例するのではないかと考える。年間推移をみることで今後どのような食事形態が求められるのかを調査する。



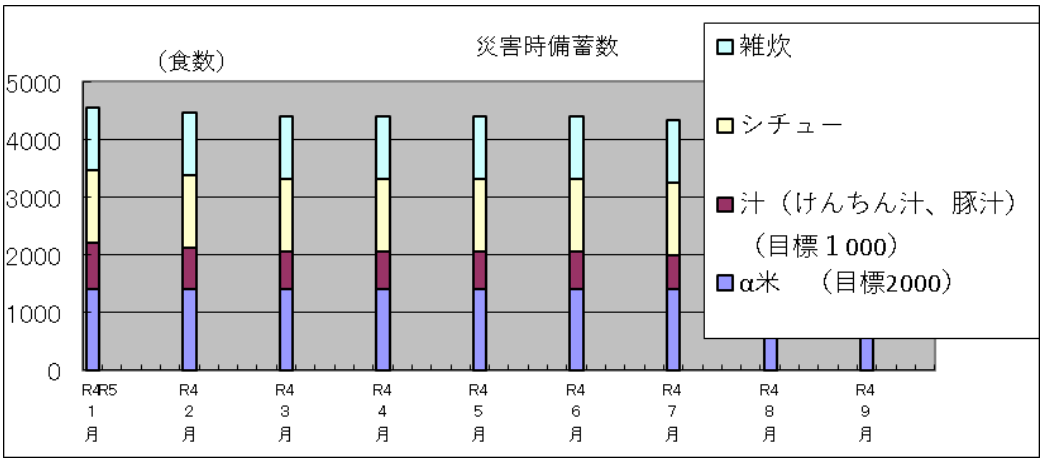
コメント

R3年4月より形態集計が可能となるようシステムを改善した。
結果として普通形態、刻み形態の割合が高く、食形態を調整する上での選択頻度も高いと考えられる。ムース及び流動形態で長期間留まることなく食形態アップが図れていると推測できた。

ロ）　災害時非常食

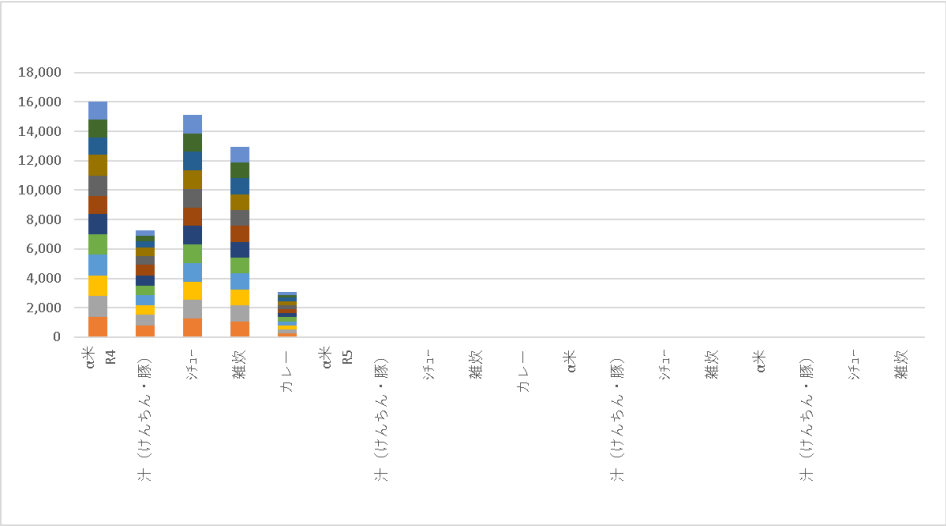
【目的】

当院では、災害時に備えた備蓄食を保管している。災害によって、電気や水道、ガスが使用できなくなったときでも、確実に患者様に食事が提供できるよう、備蓄食食数を管理していく。



食品	種類	特徴
α米	白米　わかめご飯　山菜ご飯　五目ご飯	お湯を注ぐだけで食べられます
汁	（けんちん汁　豚汁）	鍋に入れて暖めれば直ぐに食べられます
シチュー	（チキン、野菜）	食材がドライでの保存なので賞味期限が20年あります

直近5年（災害時備蓄数）

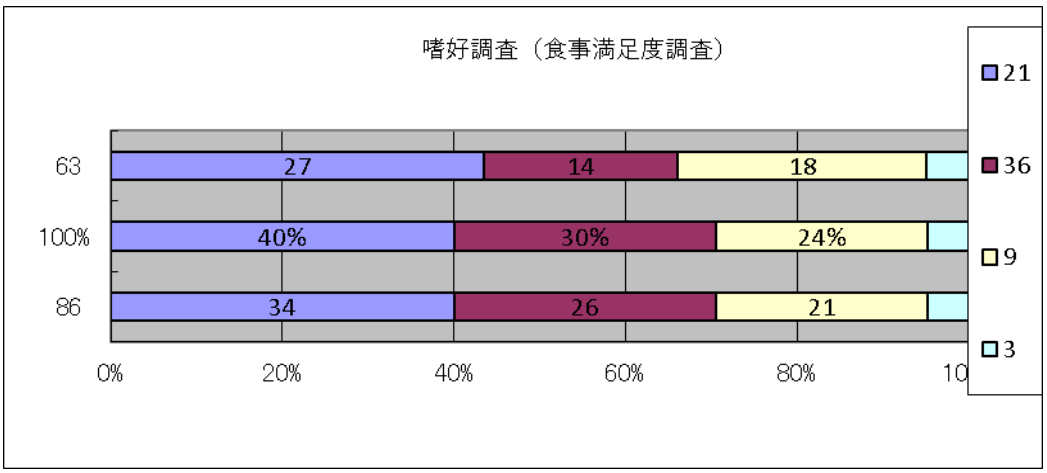


コメント

アルファ米目標数を5000食から2000食（3日分）へ変更
入院患者（100人）、職員（100人）、近辺住人（51名）　またカレールウ（温めなし）で対応可能なため非常食に組み入れた。

ハ） 嗜好調査（食事に対する満足度調査）

【目的】
食事の基本は「おいしいこと、安全であること」である。ゲストの食事に対する評価、希望、不満を聞くことで、献立や調理に生かし、満足される食事を目指す。



人気メニューベスト5

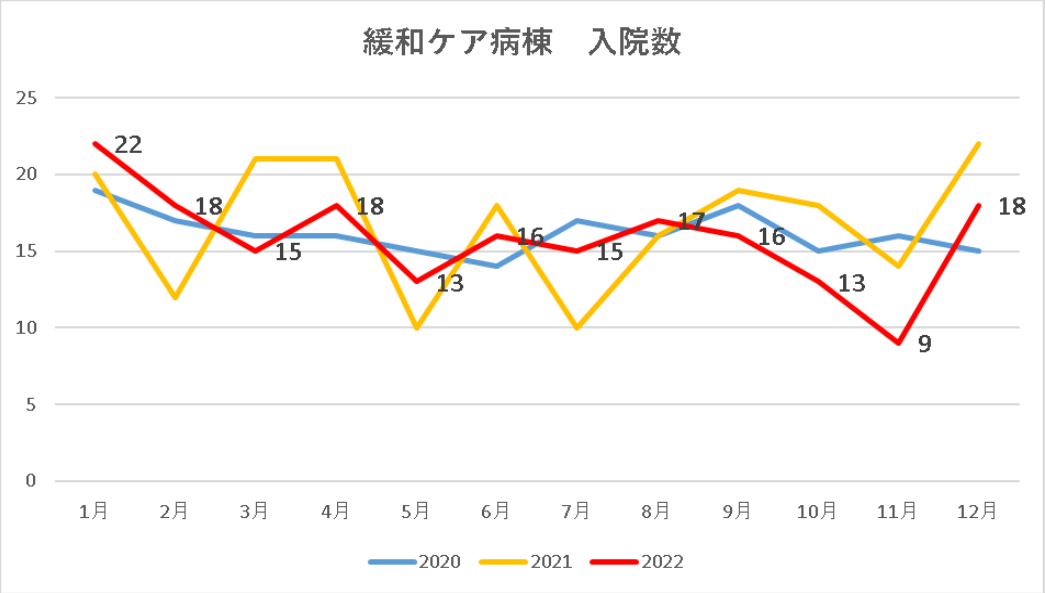
R3		R4	
うどん	肉うどん（月1回）や行事食提供による月見うどん等を提供している。人気も高く、形態も柔らく幅広いゲストに提供することができる。	ハンバーグ	肉料理の中でも人気が高く、食形態に問わず幅広く提供することが出来る。味付けも安定しており、ソース内容を変えることで応用も可能。
ちらし寿司	定期的に提供しているが、飽きが来ないよう様々な具剤を使用して見た目や味に変容性を持たせている。	カレーライス	程よい辛さと塩味、多様なスパイスによる香り。年齢問わず根強い人気がある。
カレーライス	程よい辛さと塩味、多様なスパイスによる香り。年齢問わず根強い人気がある。	ちらし寿司	定期的に提供しているが、飽きが来ないよう様々な具剤を使用して見た目や味に変容性を持たせている。毎回の調査にてランクインしている
チキン南蛮	宮崎の郷土料理であり認知度も高い。適度な酸味と柔らかい食感から安定した人気がある。	ちゃんぽん	本年より試験的に導入した結果、大変好評なメニューとなる。具材も豊富であり、しっかりとした味付けが印象深い様子。次年度より定期提供としていく。

コメント
嗜好によって喫食率にも影響もあるが、高齢者も多くなっているためか食べにくいメニューの時は残渣量が多い事が見られている。又柔らかい食事や食材を好まれる方と苦手な方もおり、患者さんに美味しいと言って食べてもらえるには、工夫をした調理が必要である。今後献立の見直しや調理機器を駆使して「食事の満足度」が上がるように検討していく。

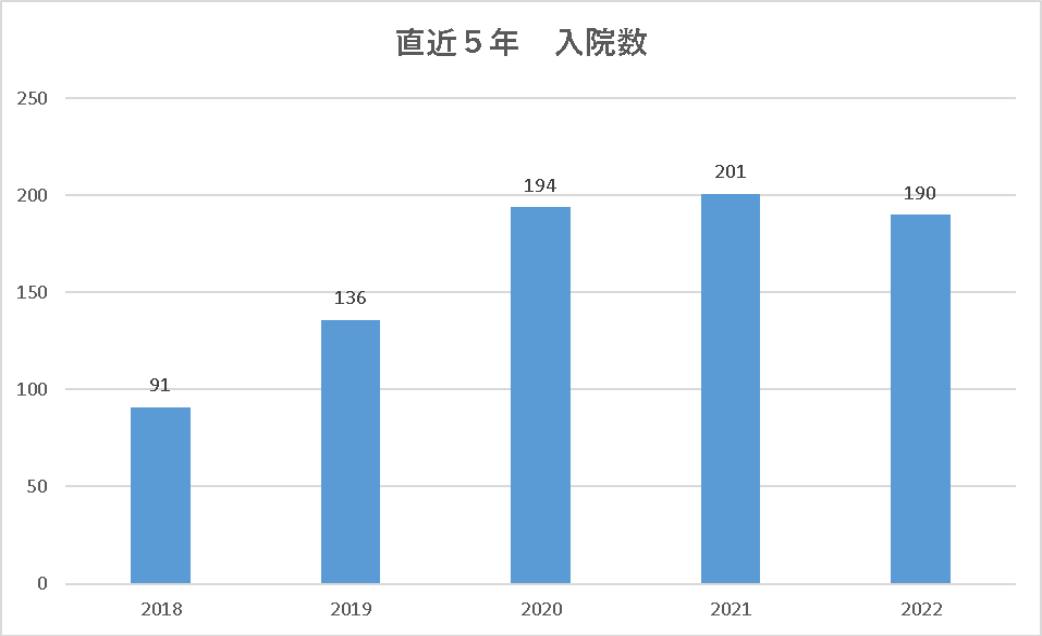
7. 緩和ケア病棟　　緩和ケア病棟　科長　長友優

イ）　入院数

【目的】
地域での緩和ケア病棟の需要を知ることができる。



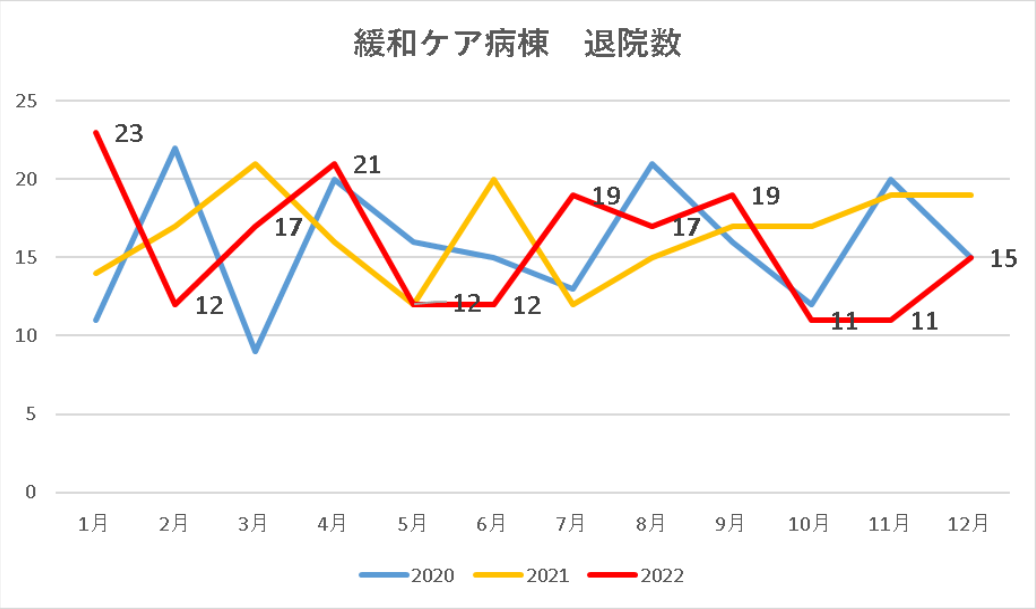
直近5年（入院数）



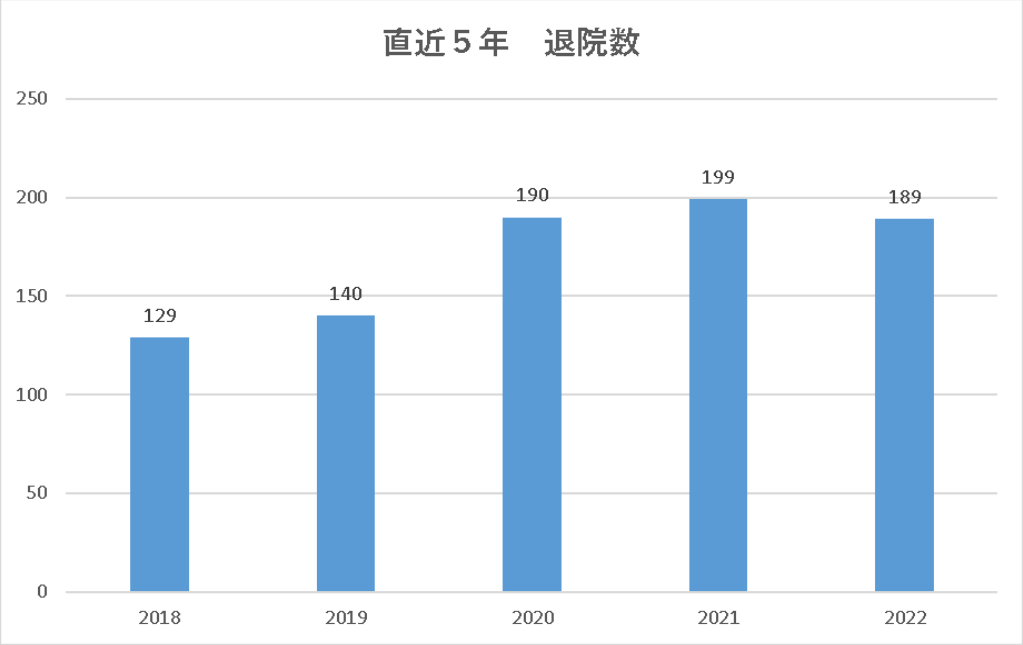
コメント
年始の稼働率は高っかったが秋から年末にかけて紹介数、再入院の減少により
昨年を超えることはできなかった

ロ） 退院数

【目的】
死因の第1位である癌患者の死亡時期に季節が関係するかなど統計で見る事で職員の配置や有給消化業務の見直しができる。



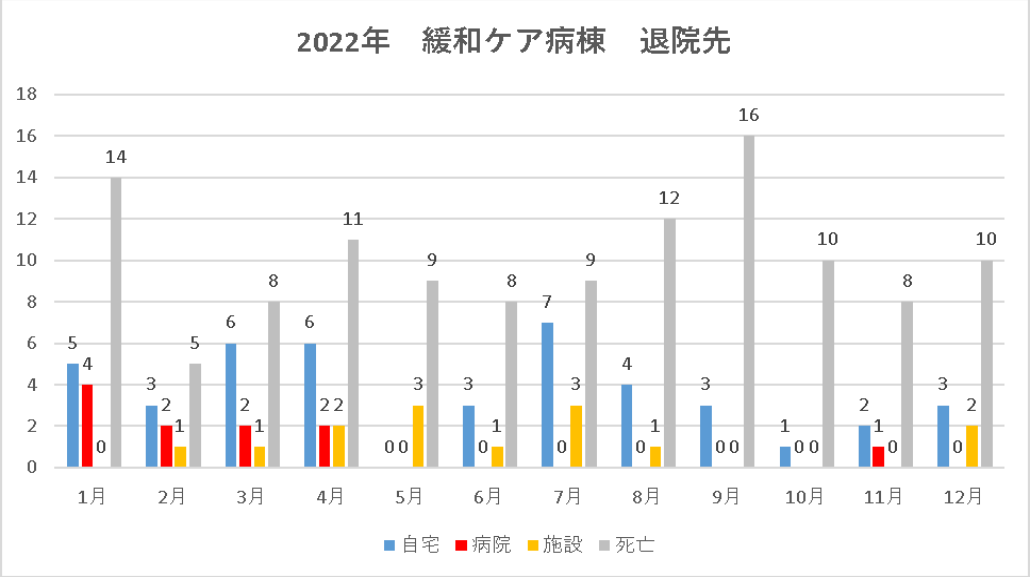
直近5年（退院数）



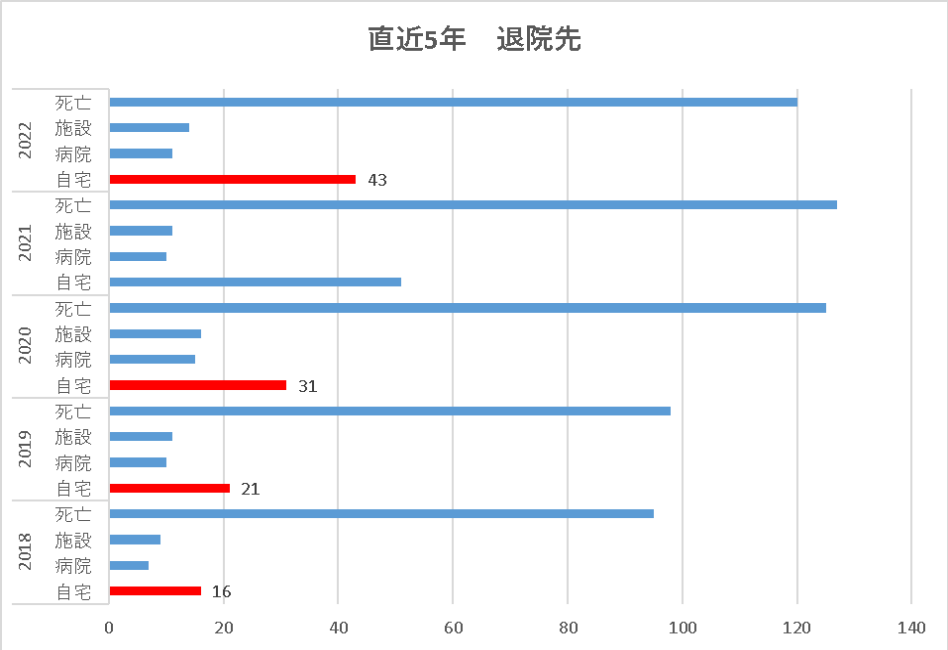
コメント
入院者数の減少が影響し、退院者数も例年と比較し少なくなっている

ハ） 退院先

【目的】
退院先を知る事で今後必要とされるのｻｰﾋﾞｽ提供を考える事ができる。
（地域連携の必要性など）



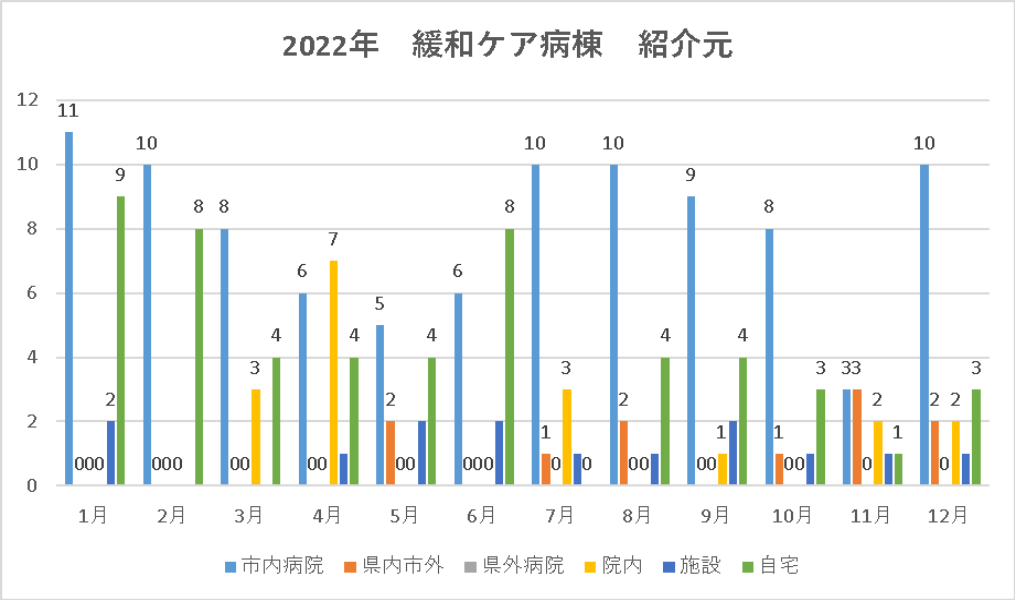
直近5年（退院先）



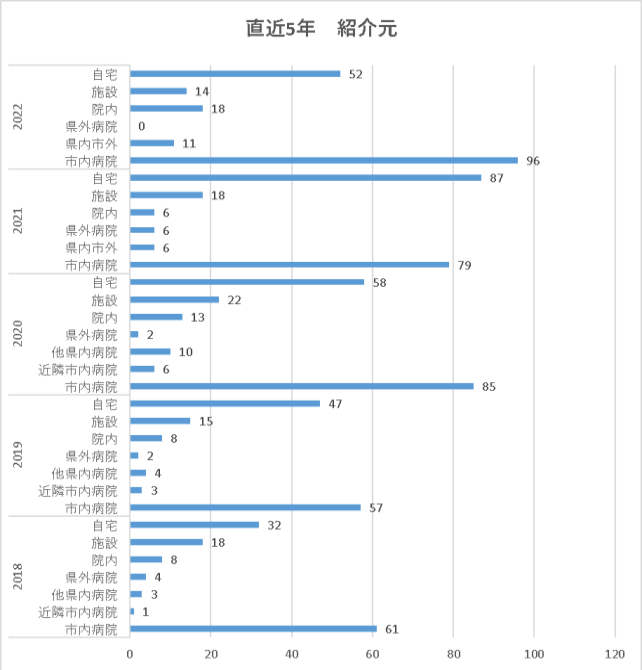
コメント
自宅へ退院される方が年々増えており、過去5年において最も高い数字となった。
今後より在宅系サービスや地域との連携が必要と考える

ニ） 紹介元

【目的】
地域連携先の強化すべきところがみえてくる。



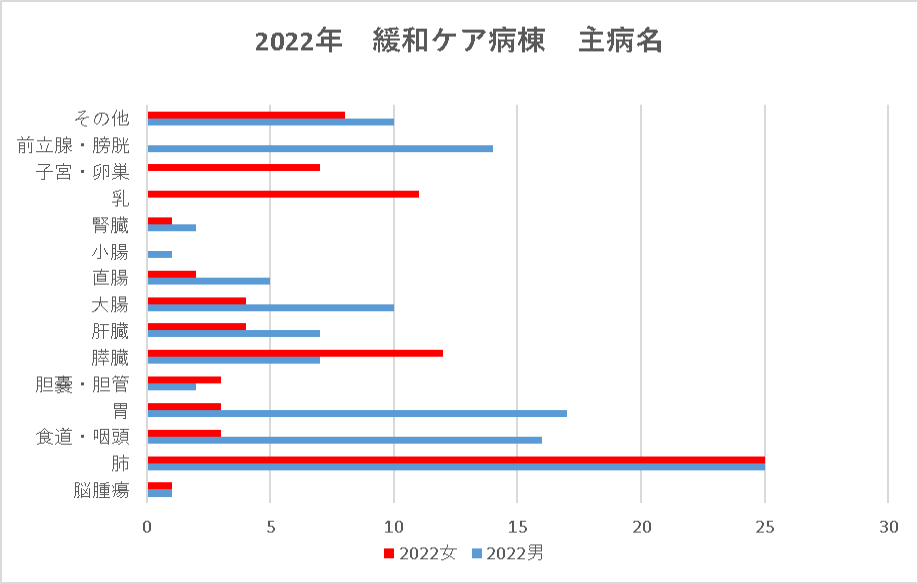
直近5年（紹介元）



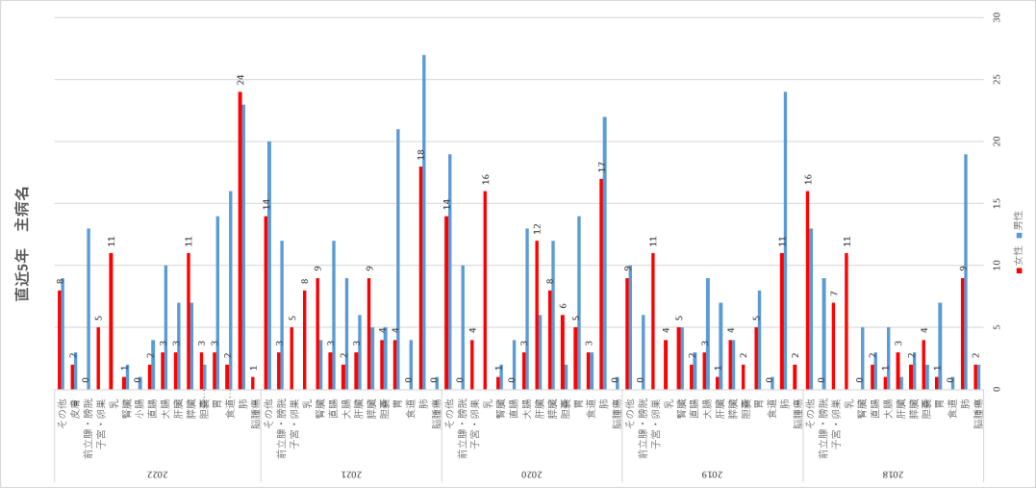
コメント
今年度の特徴として院内からの転院が多くなっており、地域連携や病棟、
医師間の連携がスムーズに行われた結果と考える

ホ） 主病名

【目的】
性別や主病名、再入院の相関関係から治療やベッドコントロール、
地域との連携の一助とする健診に役立つ。地域への呼びかけに役立つ。



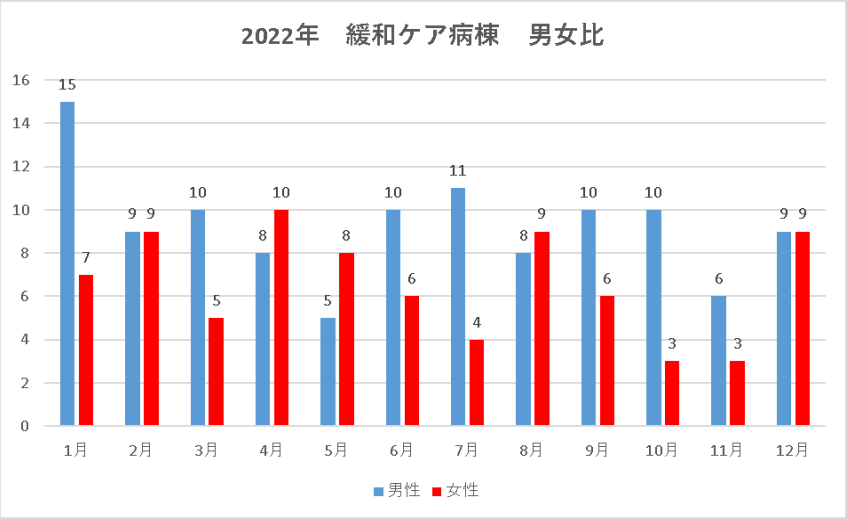
直近5年（主病名）



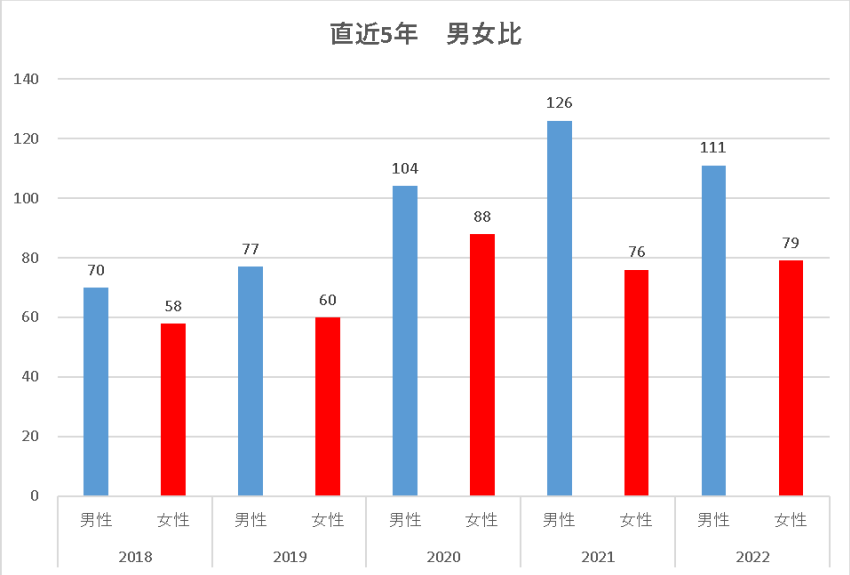
コメント
男女共に肺癌ゲストが最も多く、呼吸器評価やリハビリテーション等の
需要が高いと考えられる

へ） 男女比

【目的】
健診に役立つ。地域への呼びかけに役立つ。



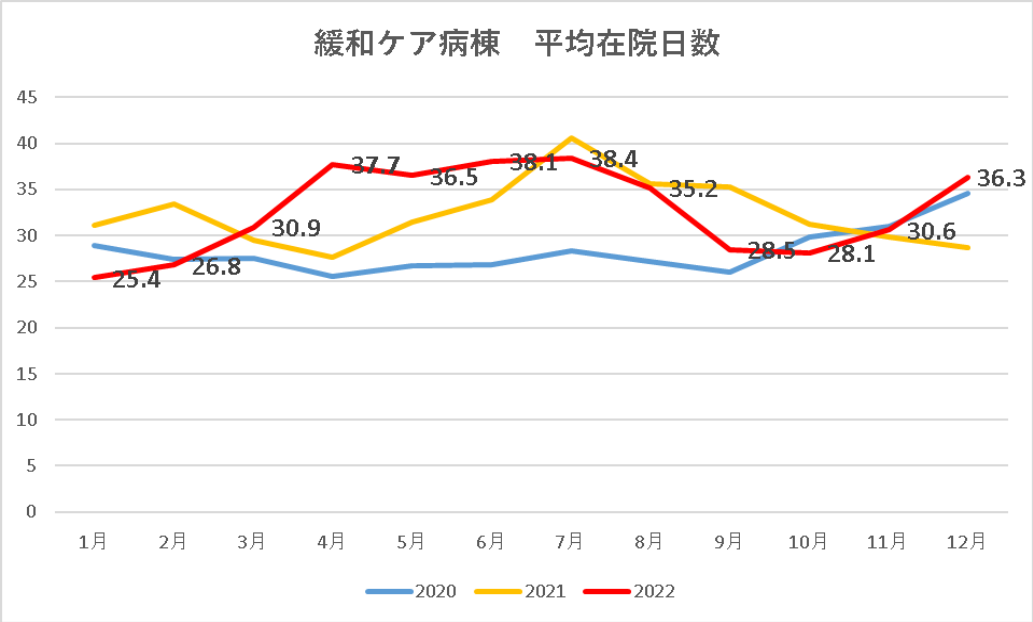
直近5年（男女比）



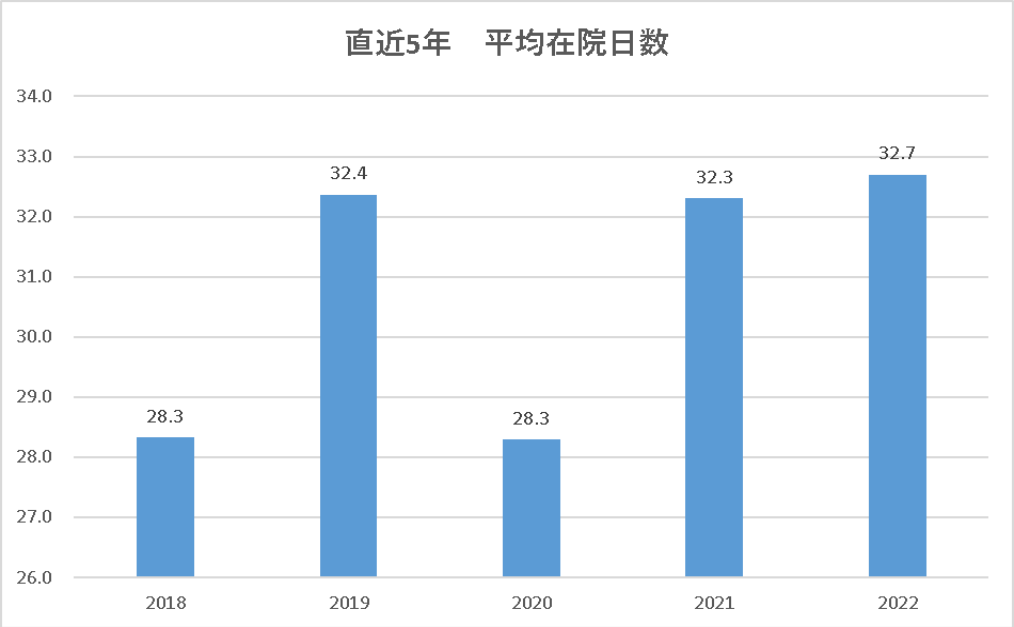
コメント
過去5年男性の比率が多く、男性に特化したサービスやベッドコントロールを
行って行く必要がある

ト）　平均在院日数

【目的】
満床時は待ち日数が読めるようになる。外部へ情報提供に使える。



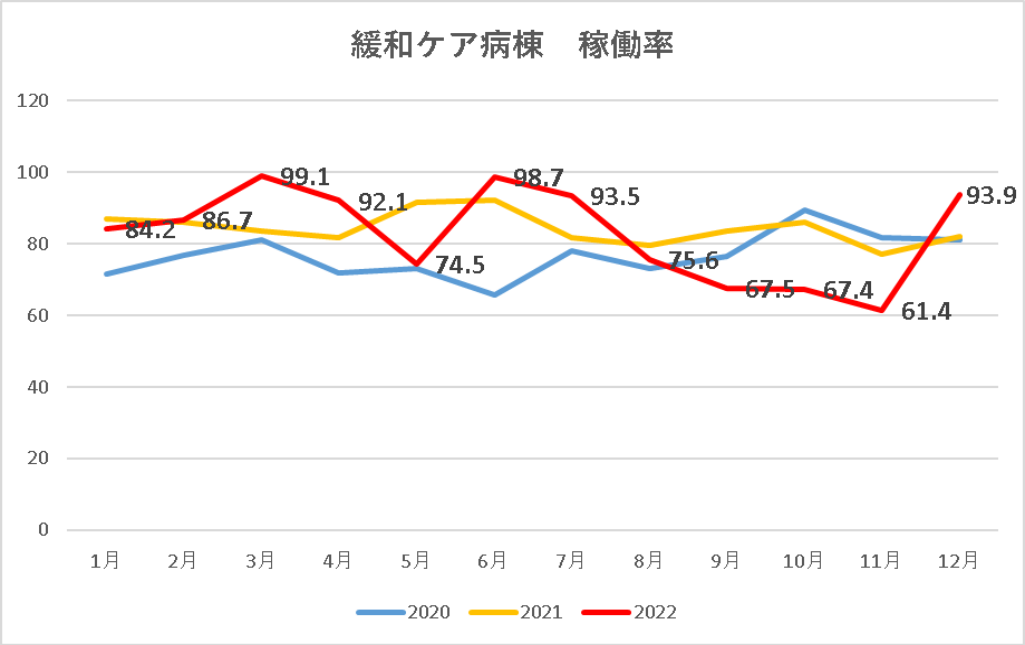
直近5年（平均在院日数）



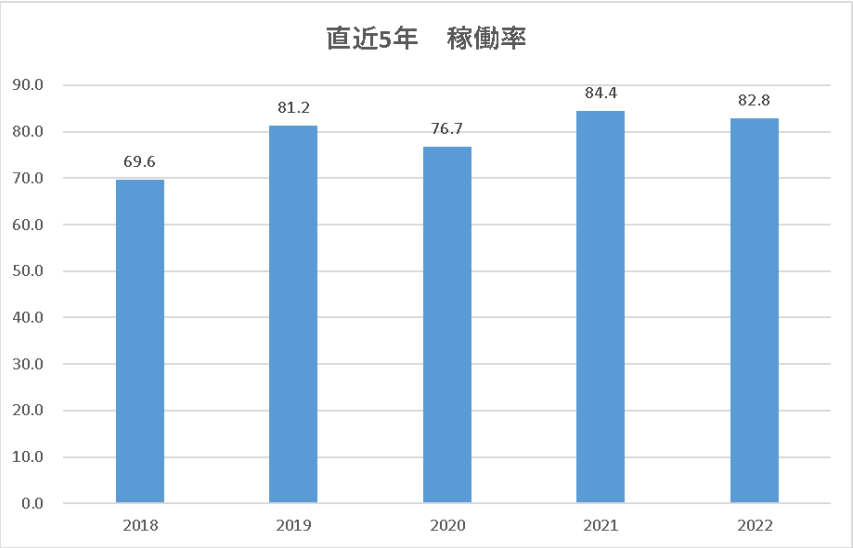
コメント
2017年以降在院日数は年間30日前後で経過。主病名や退院先等の明らかな相関関係も認められていない

チ） 稼働率

【目的】
緩和ケア病棟の必要性や収入がみえてくる。



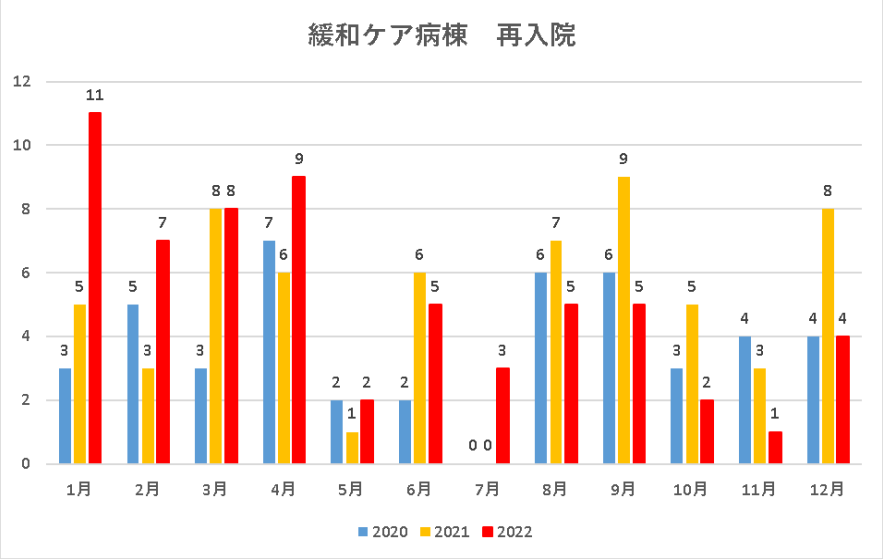
直近5年（稼働率）



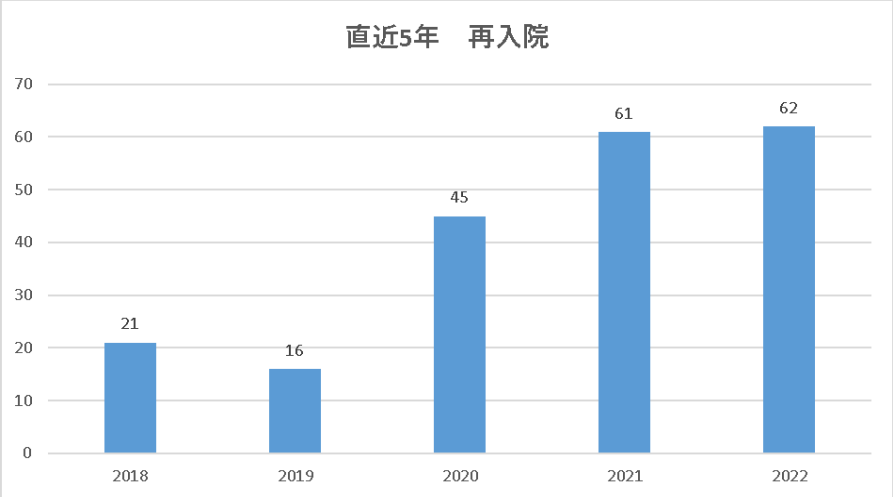
コメント
9月～11月の再入院、入院の紹介数が少なく昨年の稼働率を超えることはできなかった。
また別データにて9月～11月におけるゲストが入院後1週間以内の死亡退院者も昨年の2倍程度増加しており、稼働率に影響したと考えられる。

リ）　再入院

【目的】
入院が死亡に繋がるのではなく、より良く生活するために入院という
手段があることを宣伝できる。



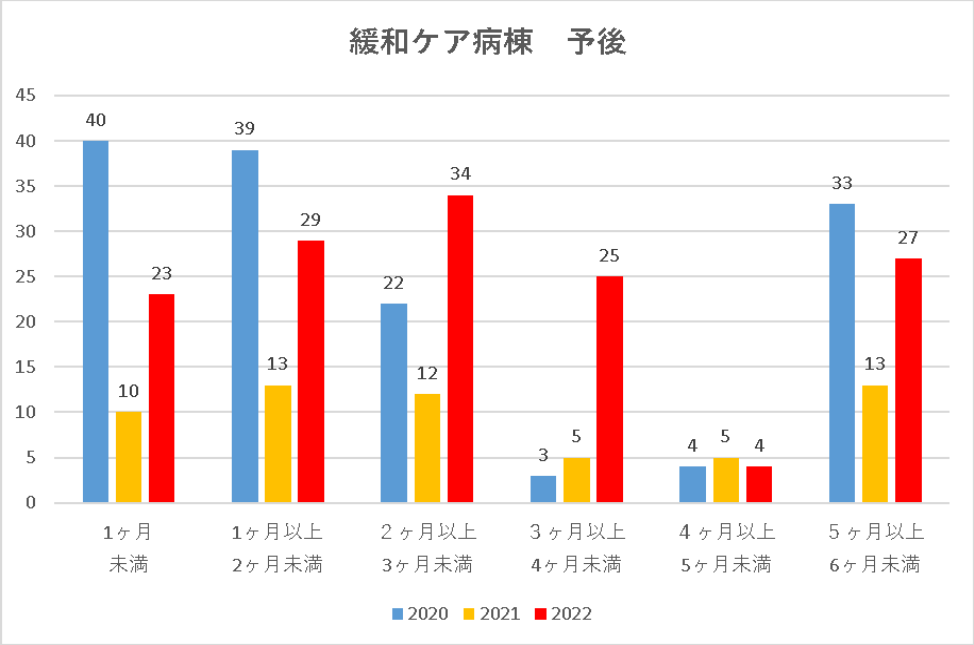
直近5年（再入院）



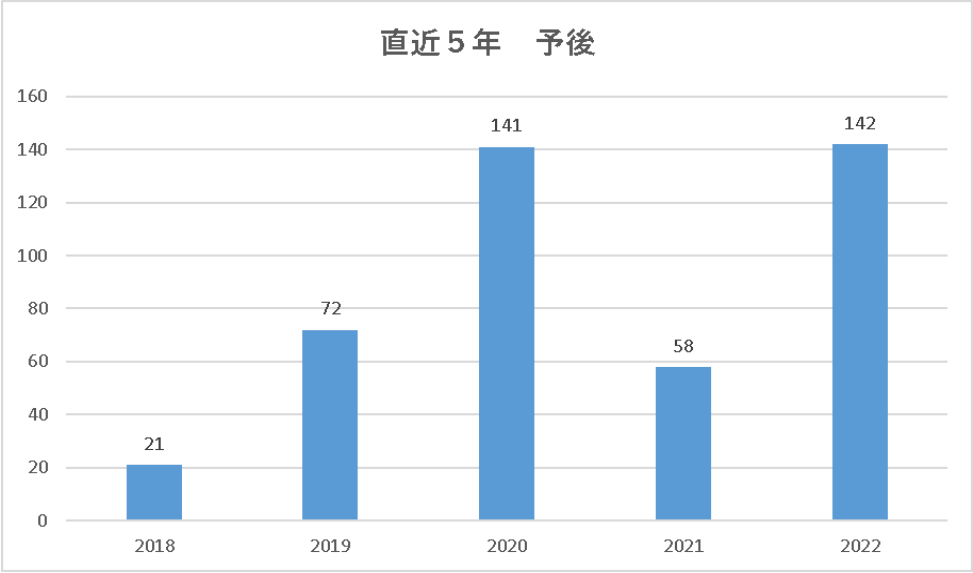
コメント
緩和ケア病棟と外来医師が兼務していることで再入院の件数は2020年以降、
増加傾向にあり稼働率向上の一助となりえる

ヌ）　予後

【目的】
転院や入院のタイミングを明らかにし、稼働率向上の一助とする



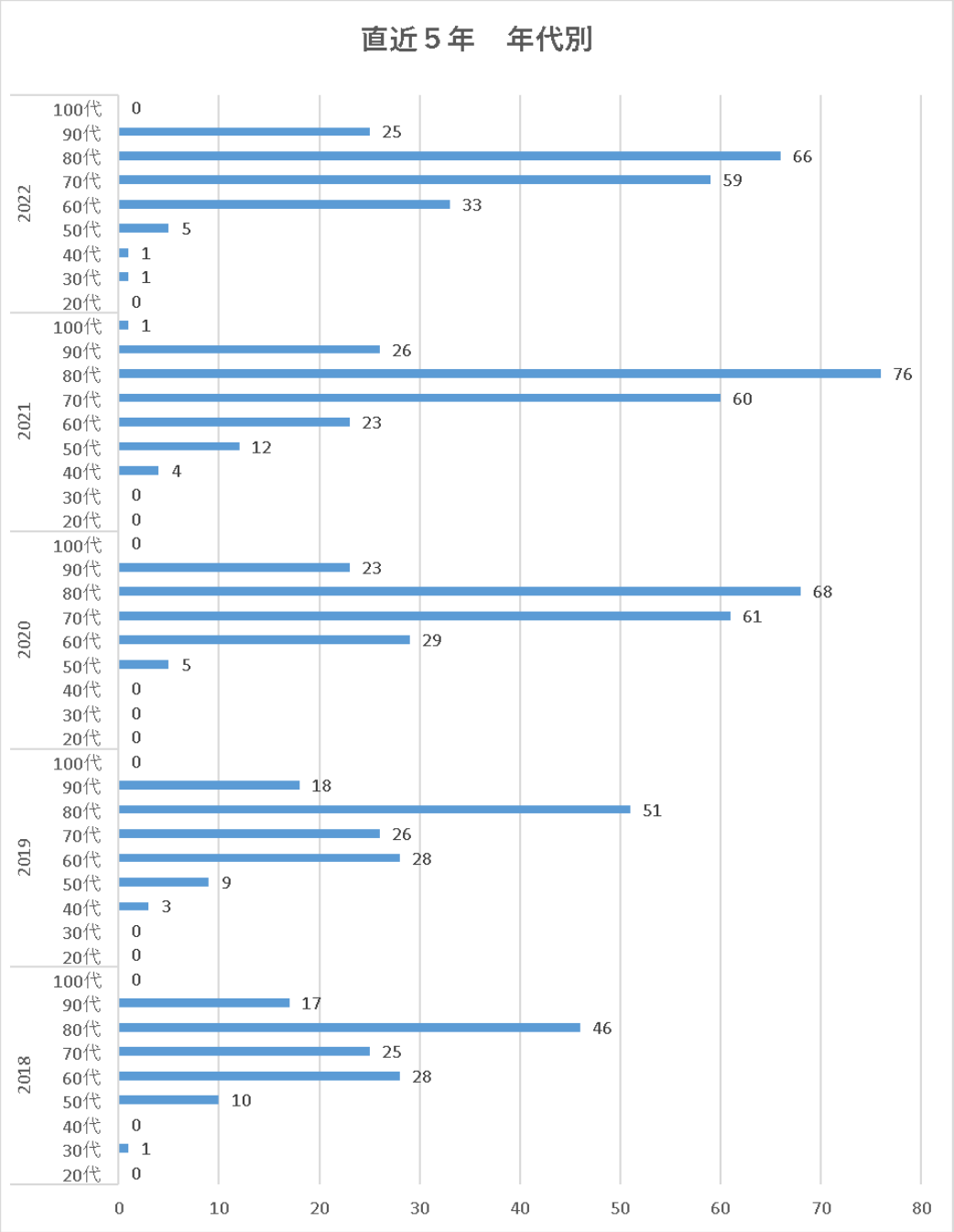
直近5年（紹介時点の予後予測）



コメント
予後１～2ヵ月で緩和ケア病棟を転院先と考えるケースが最も多く、入院後1週間以内の死亡退院も多くなっていた状況から、もう少し早いタイミングで入院してもらえるよう地域や市内外の病院への広報が必要。

ル） 年代別

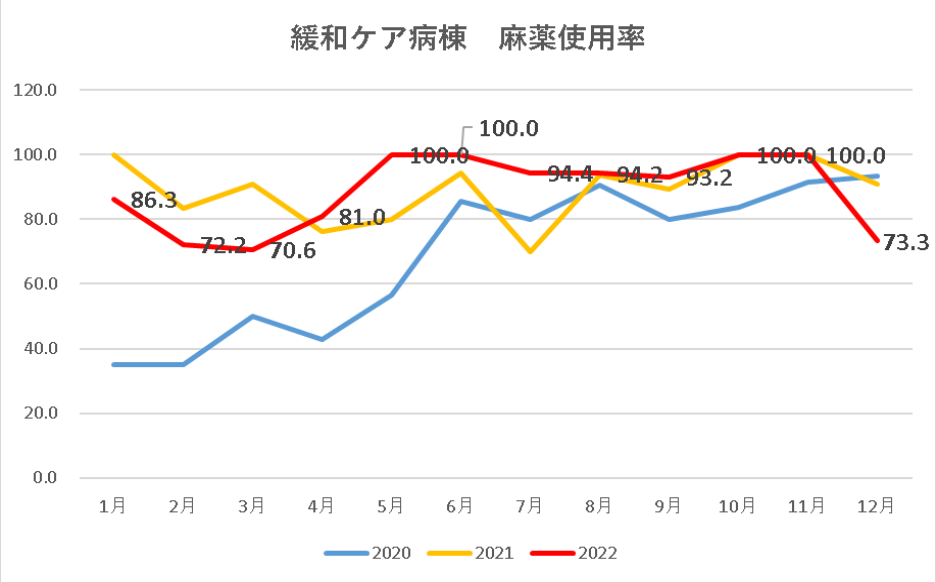
【目的】
ターゲットの層を明らかにし、伴ったサービスを提供するための一助とする
年齢層と他のデータを組み合わせて視ることで稼働率向上の一助を得る



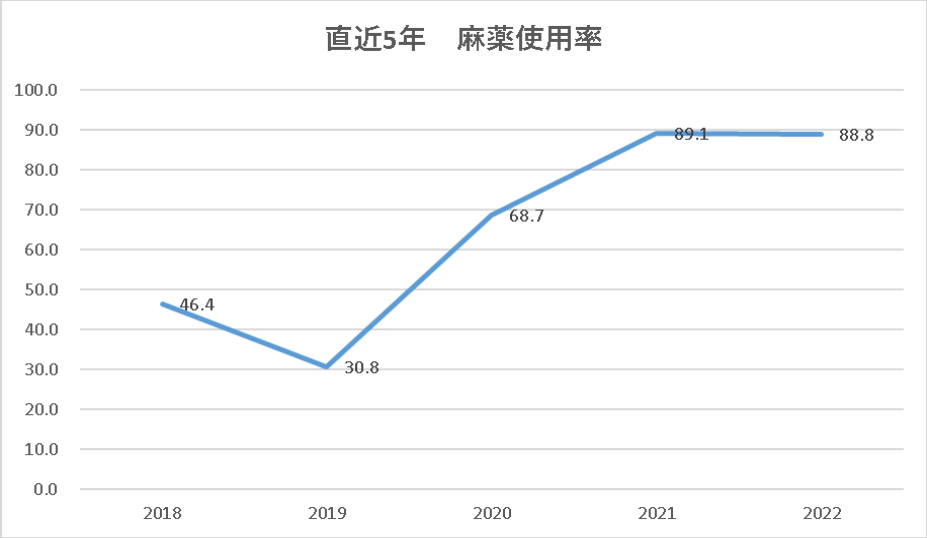
コメント
ターゲット層は80代と考えられ原則は個別サービスであるが、80代の方の特徴等を理解したサービス提供が必要

ヲ）　麻薬使用率

【目的】
その他のデータと組み合わせてみることで麻薬の適切な麻薬使用の一助となりえる



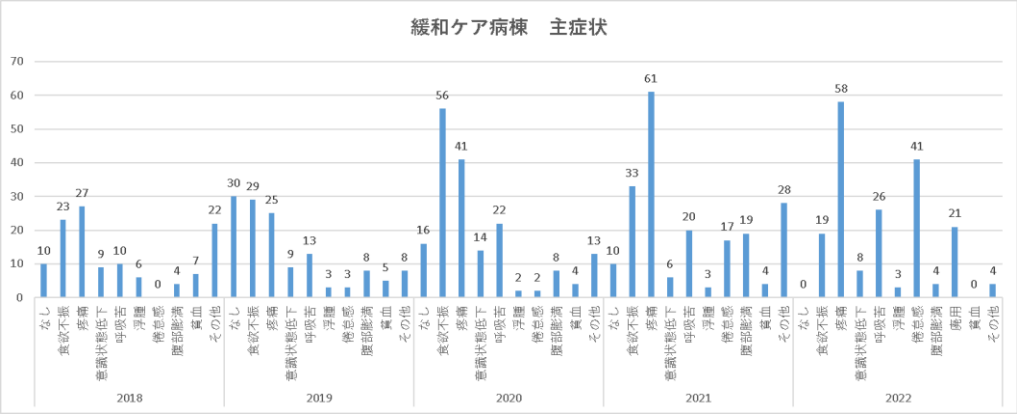
直近5年（麻薬使用率平均）



コメント
麻薬資料率は2019年以降増大傾向あり、2022年は横ばいに推移。主症状として疼痛を訴えるゲストも比例して増大しており相関関係を認める。

ワ） 入院時の主症状

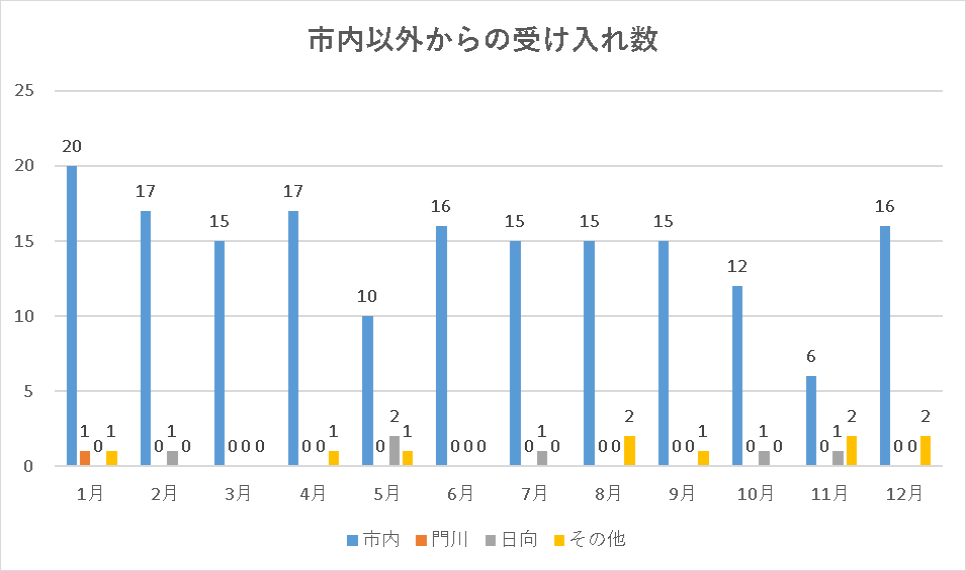
【目的】
緩和ケア病棟における治療、サービス向上の一助とする



コメント
入院時の主症状として疼痛が増加傾向にあり2022年は横ばい。2022年診療報酬改定においても、疼痛評価が加算として新設されており、今後疼痛の評価、治療、コントロールが緩和ケア病棟に求められる。

カ） 市内以外からの受け入れ

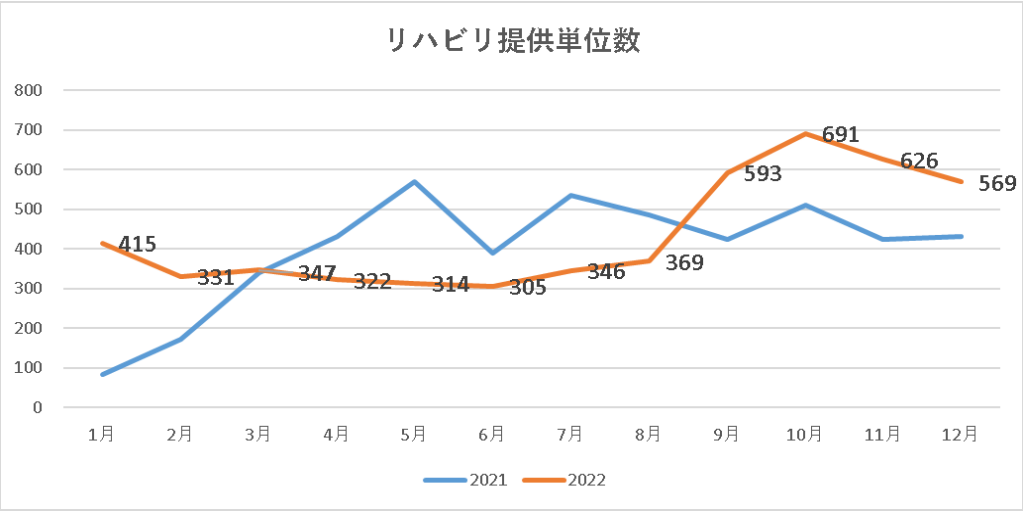
【目的】
緩和ケア病棟の増床を行う上で市内以外の受け入れ件数の動向から稼働率向上の



コメント
市内の受け入れが全体の9割以上を占めており、市内以外の病院や居宅、地域包括等へ営業活動を行う必要がある。

ヨ）　リハビリ提供単位数

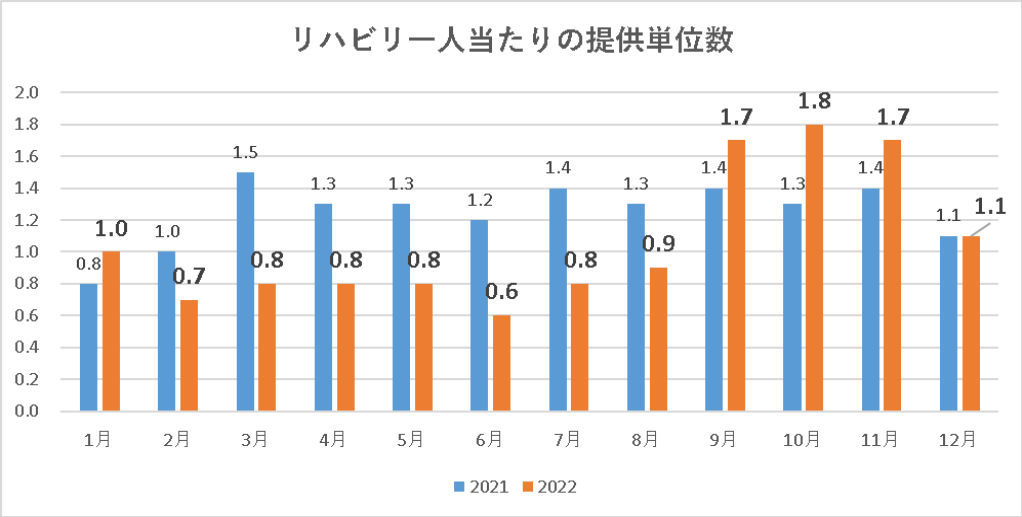
【目的】
当院の緩和ケア病棟の特徴であるリハビリテーションの提供の実績を把握する
リハビリ提供数と在宅復帰率の相対関係から効率的な介入を検討する一助とする



コメント
9月よりセラピストが増員したことで提供単位数の増大を認めている。

タ）　リハビリ一人当たりの提供単位数

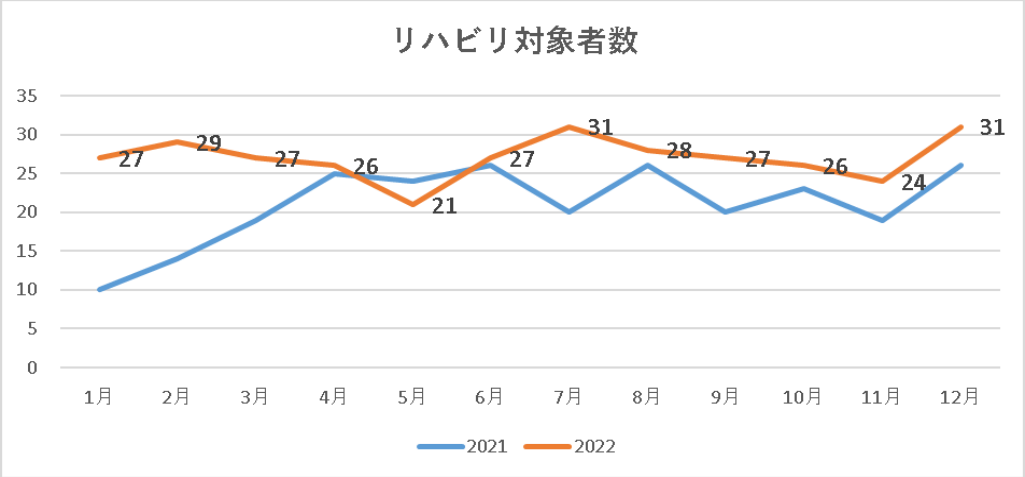
【目的】
在宅復帰率の相対関係から効率的な介入を検討する一助とする



コメント
9月よりセラピストが増員したことで提供単位数の増大を認めている。
また、在宅復帰者も増大傾向にあり、提供単位数の増大が在宅復帰の一助となっていると考える

レ）　リハビリ対象者数

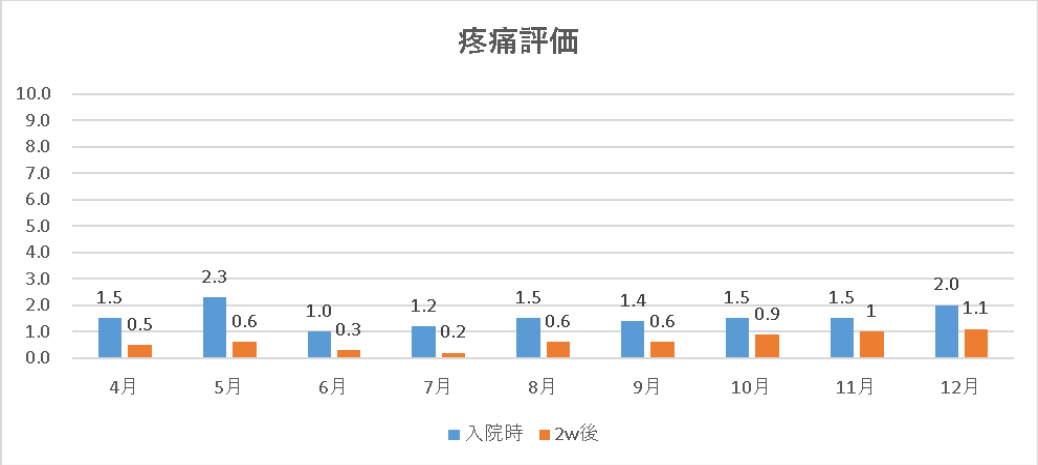
【目的】
2022年4月より疼痛評価が加算として導入された背景を受けて、緩和ケア病棟における疼痛緩和が効果的に行われているかを確認する



コメント
緩和ケア病棟の稼働率は過去5年で比較しても高い基準で推移しており、
それに伴ってリハビリ対象者も増大している。

ソ）　疼痛評価（FS）

【目的】
2022年4月より疼痛評価が加算として導入された背景を受けて、緩和ケア病棟における疼痛緩和が効果的に行われているかを確認する



コメント
入院後2Wで平均6割の疼痛緩和を認めており、一定の疼痛緩和が行えていると考える

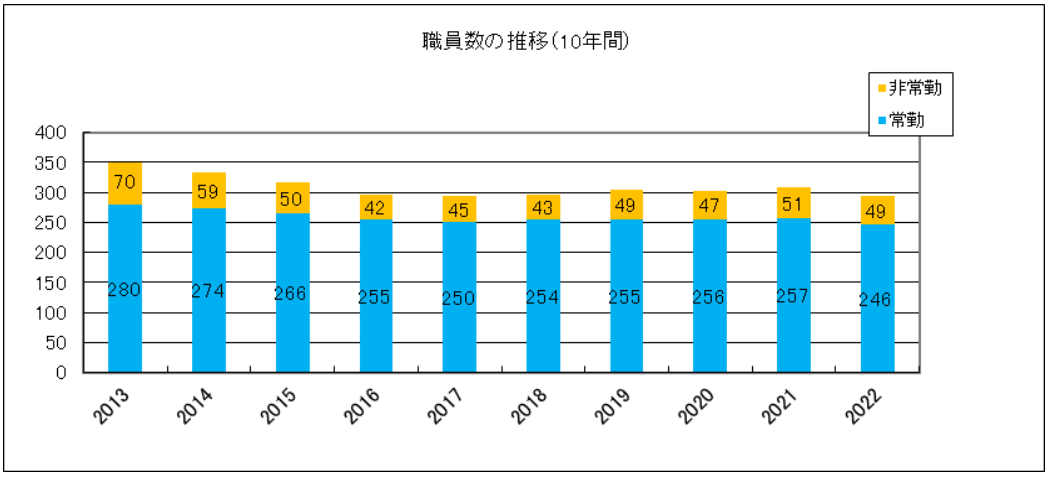
Ⅷ.運営管理

10. 人事労務

かつて病院はきつい・きたない・危険の3Kといわれていた職場であり、疾病や障害のある「ヒト」と接する以上、仕方のない面はあります。よって職員のストレスを必要以上与えないよう、時間外労働の削減、有給休暇の完全取得、子育て支援、メンタルヘルス、成長学習支援などを行い、より良い職場環境の提供に努力しています。

イ）職員数

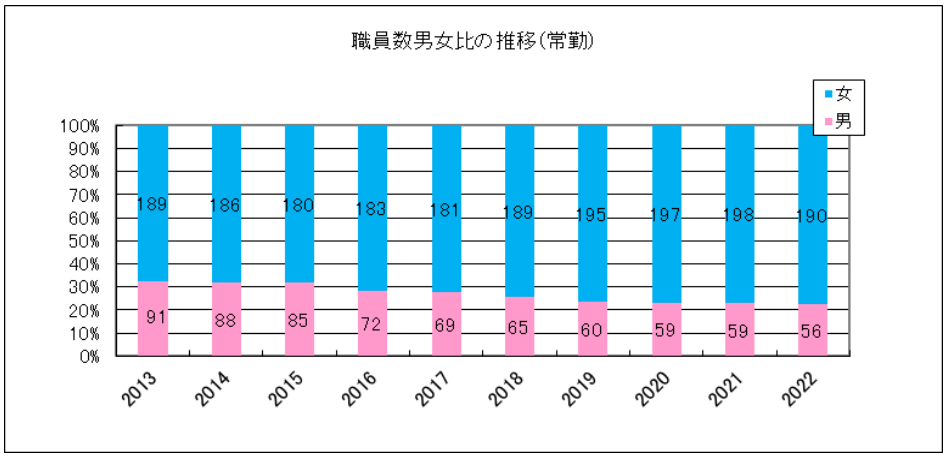
【目的】
職員数の把握　人件費率調査のデータ



コメント
2013年常勤数280名、非常勤70名をピークとして、2017年まで常勤、非常勤ともに減少傾向であった。2014年に人件費率調整を行った結果である。
近年は300名前後で推移している。

ロ） 職員男女比

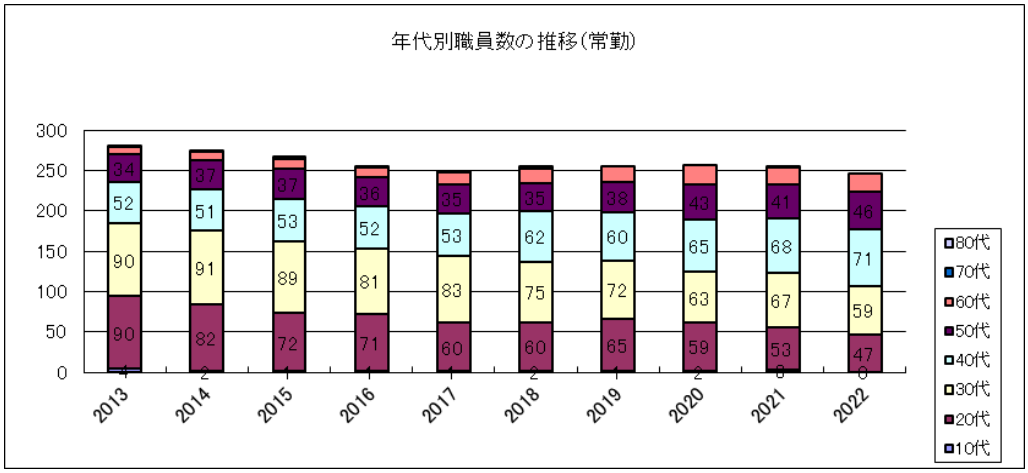
【目的】
男性職員と女性職員数の比率の調査



コメント
2011年男性職員は93名であったが、年々減少傾向であり、
60名前後で推移している。
女性職員数は、190前後で推移している。

ハ） 職員年齢構成（常勤）毎年度４月１日時点

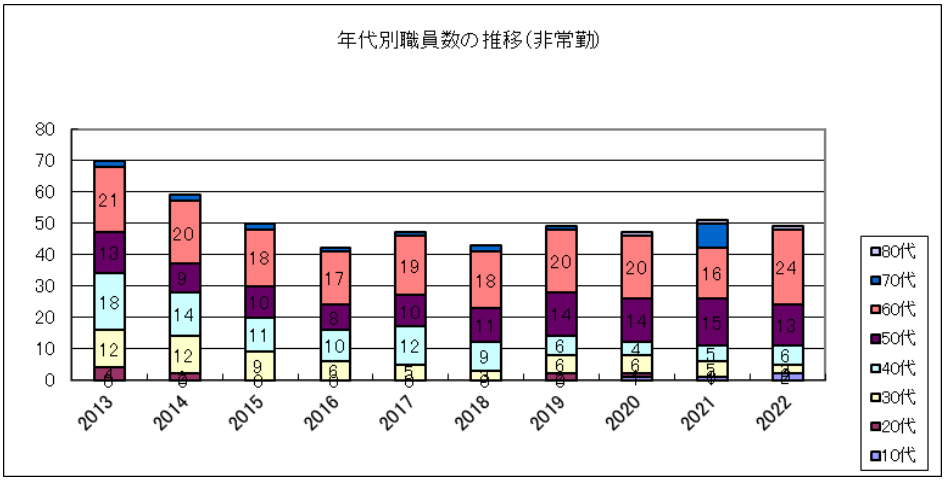
【目的】
年代別常勤職員数の推移調査



コメント
2011年、20歳代の職員数は106名であり、新病院へ移行して3年目で
新規雇用採用を行っていた。20歳代から30歳代の職員数は減少し、
40歳代職員の増加がみられる。

ニ） 職員年齢構成（非常勤） 毎年度4月1日時点

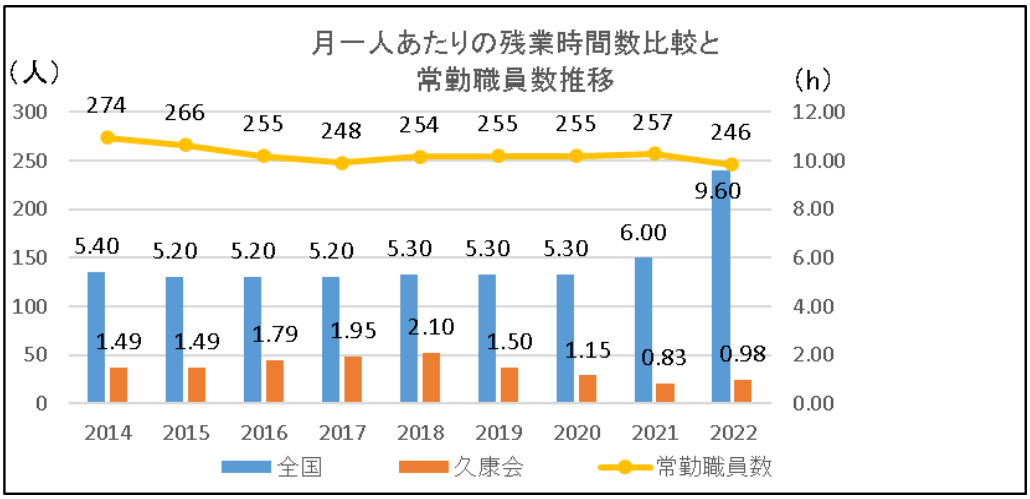
【目的】
年代別非常勤職員の推移調査



コメント
リネン、清掃業務職員が多くを占めているが、2013年に人員調整を行っており
非常勤数は減少している。
2021年度より病院給食を直営化し、調理、洗浄職員を増員している

ホ） 総残業時間 一人当たり

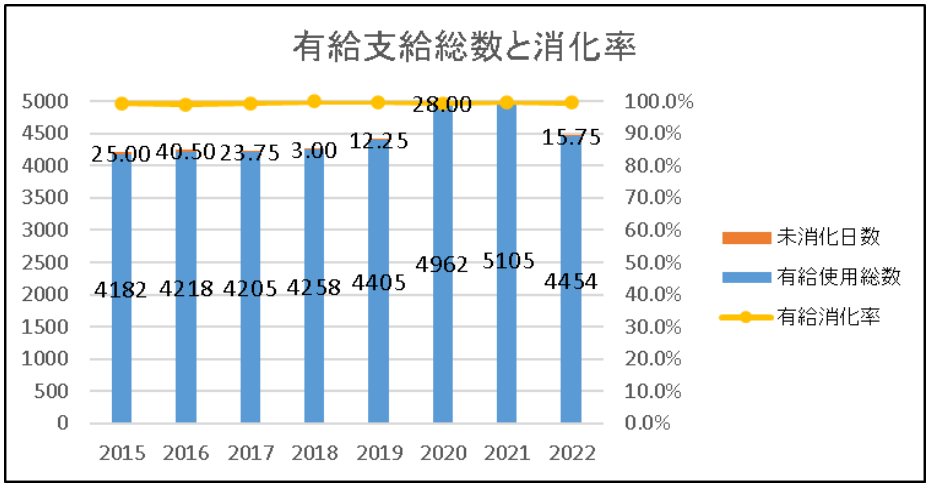
【目的】
久康会と全国の月平均残業時間の比較残業時間から、労働量の評価を行う。



コメント
2018年1人あたりの残業量は2.1時間であり、病院機能評価受診前、電子カルテ導入準備であったことが理由である。電子カルテ導入後は残業時間が減少傾向である。

へ） 有給休暇

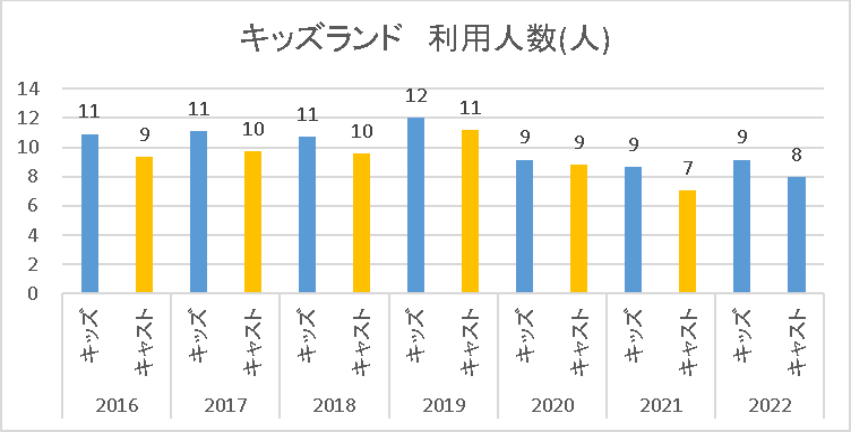
【目的】
有給消化率100%を目指している。職員が計画をもって有給を取得しているかの指標である。



コメント
2022年有給消化率は99.7%、有給未消化日数は15.75日であった。
産休による有給未消化など100%は達成できなかったが、
ほぼ100%消化は達成している。

ト） キッズランド利用者数

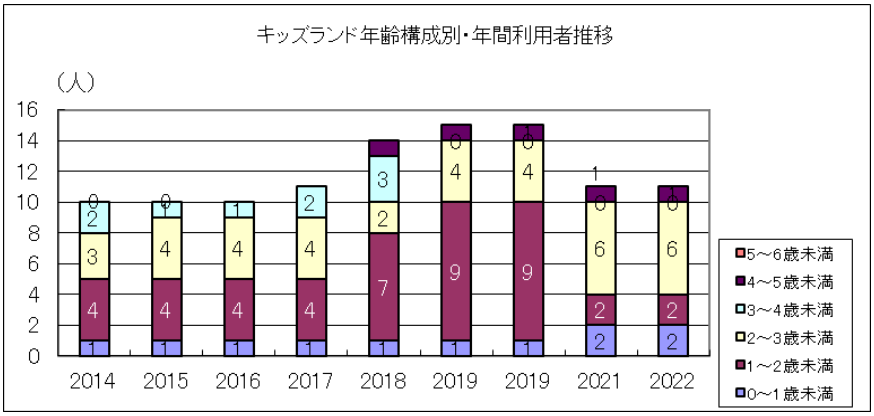
【目的】
キッズの子供受入数と職員利用者の調査



コメント
2022年キッズ利用園児9名、利用職員8名であった。

チ） ｷｯｽﾞﾗﾝﾄﾞ年齢構成別・年間利用者推移

【目的】
キッズランド利用育児の年齢層の調査



コメント
2018年9月より育児休業早期復帰制度を利用したことにより
1歳～2歳未満の利用者が増加した。
1歳から継続して利用している結果である。

リ） ｷｬｽﾄ満足度調査

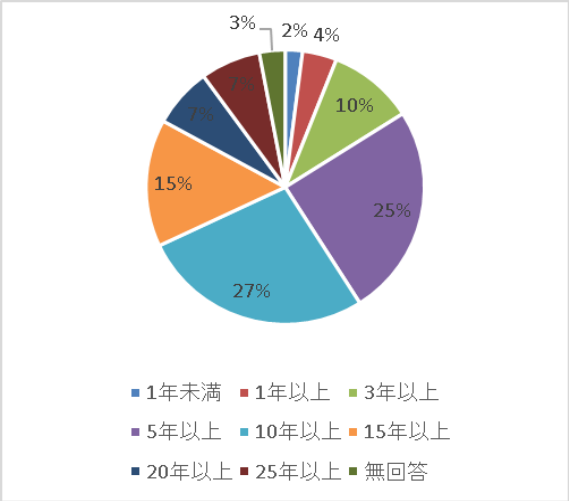
【目的】
当法人では、ﾜｰｸﾗｲﾌﾊﾞﾗﾝｽを推進している。ｷｬｽﾄ満足度向上の為。意識調査を行っている。

回答者数：150 人

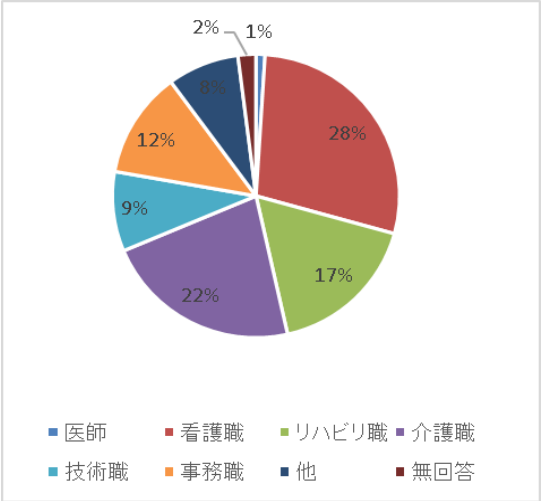
1 あなたの性別を教えてください。

2 あなたの年齢を教えてください。

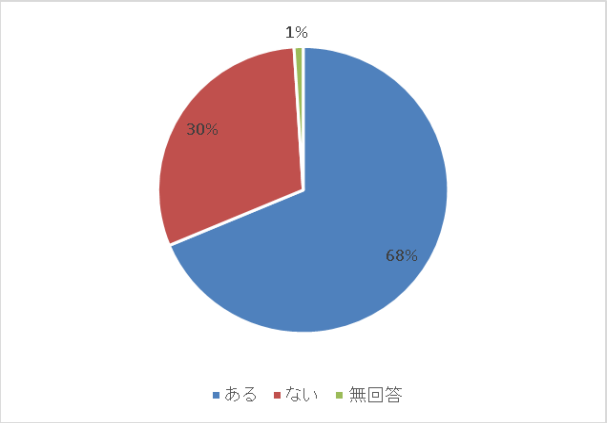
3 あなたの勤続年数を教えてください。



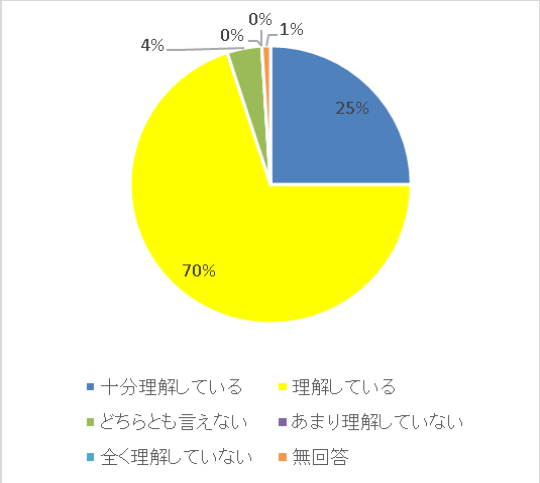
4 あなたの職種を教えてください。



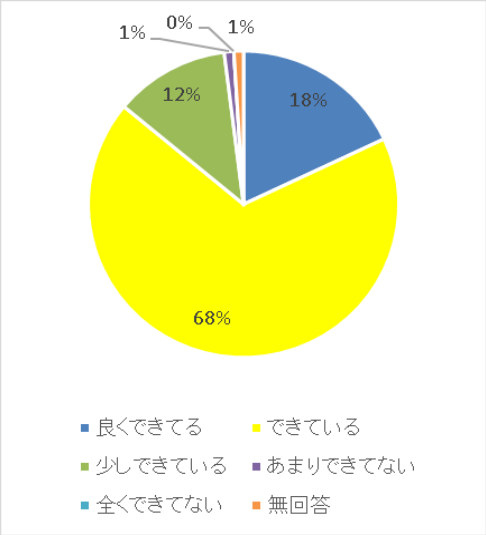
5 あなたは医療法人久康会以外に勤務したことがありますか？



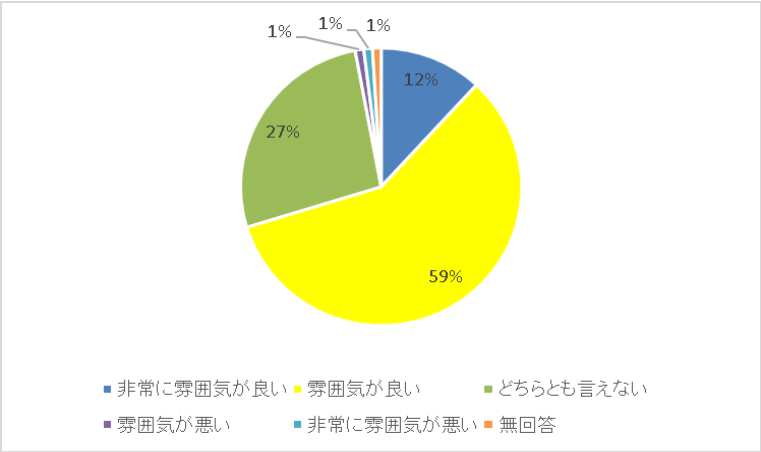
6 あなたは久康会の理念・宣言・心得を理解していますか？



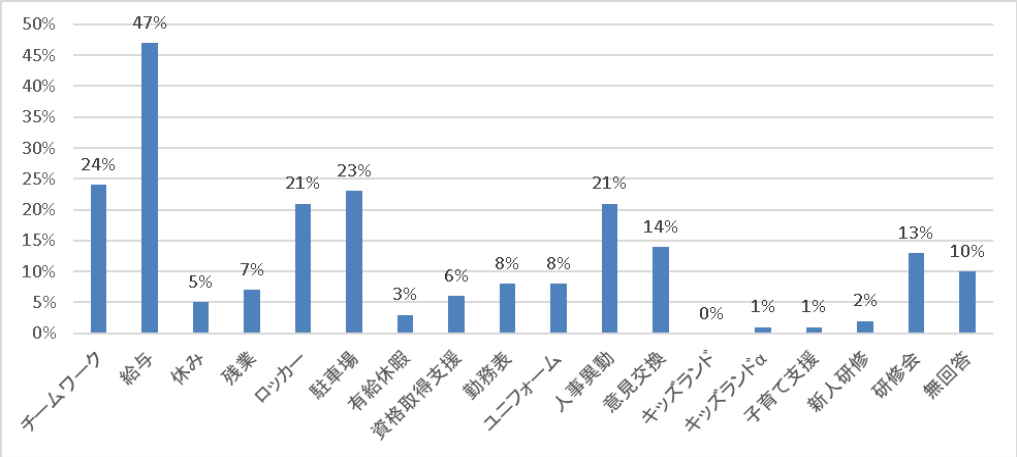
7 あなたは全ての人に笑顔とあいさつができていますか？



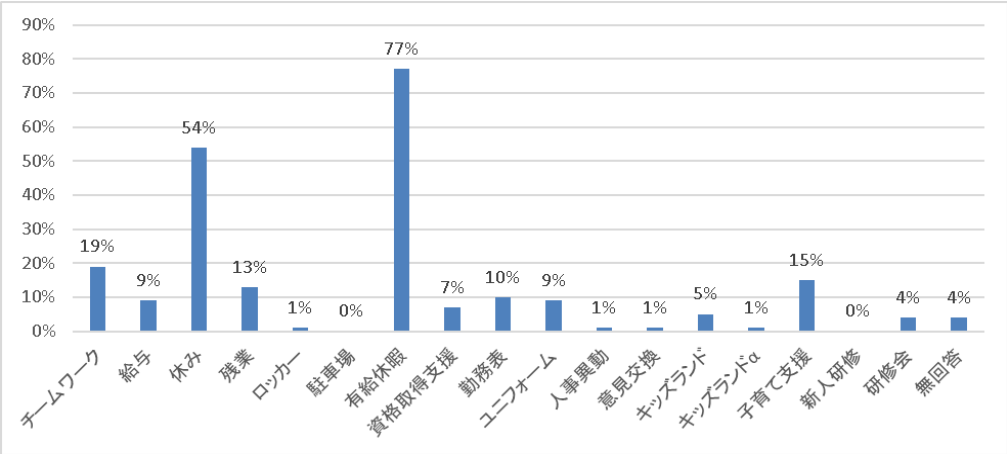
8 みんなが協力し合うなど、職場の雰囲気は良いと思いますか？



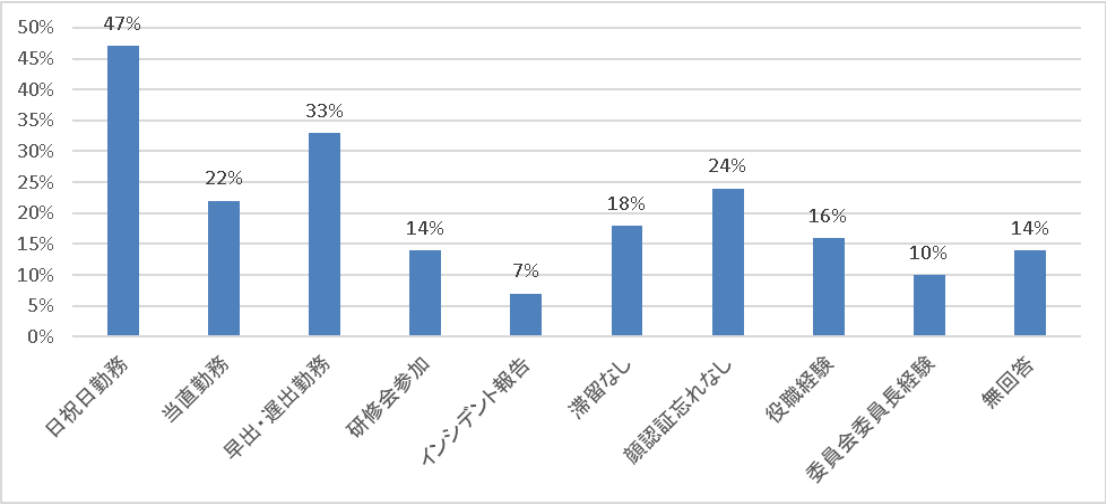
9 あなたが久康会で困っていることを、3つチェックして下さい。



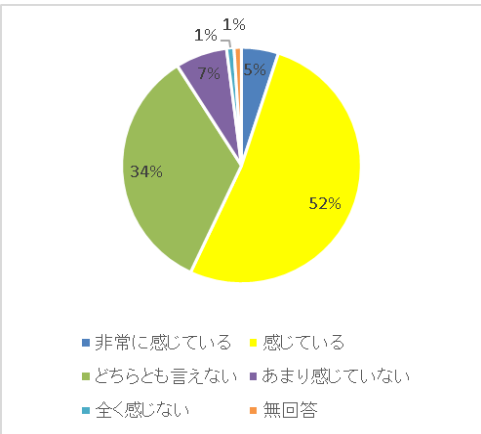
10 あなたが久康会の良いと思ってことを、3つチェックしてください。



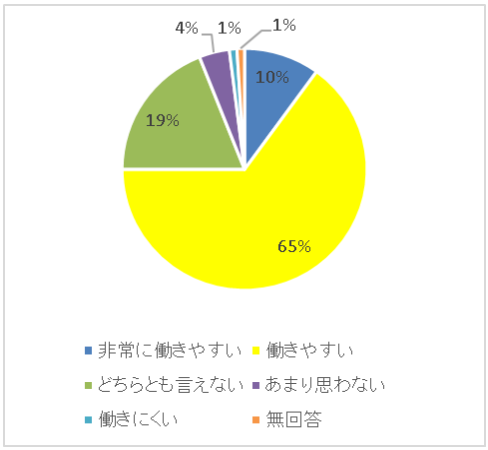
11 あなたが評価して欲しいことを3つチェックしてください。



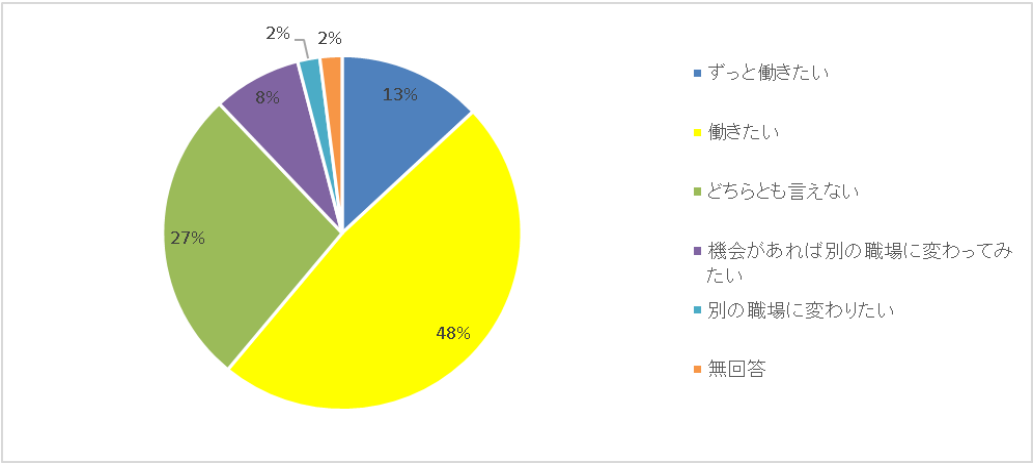
12 あなたは今の仕事に達成感や
遣り甲斐を感じていますか？



13 あなたにとって久康会は
働きやすい職場ですか？



14 あなたは、これからも今の職場で働きたいと思いますか？

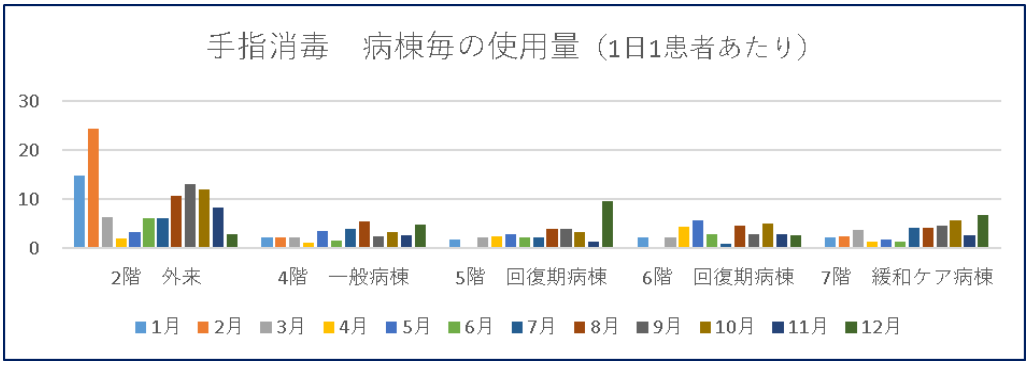


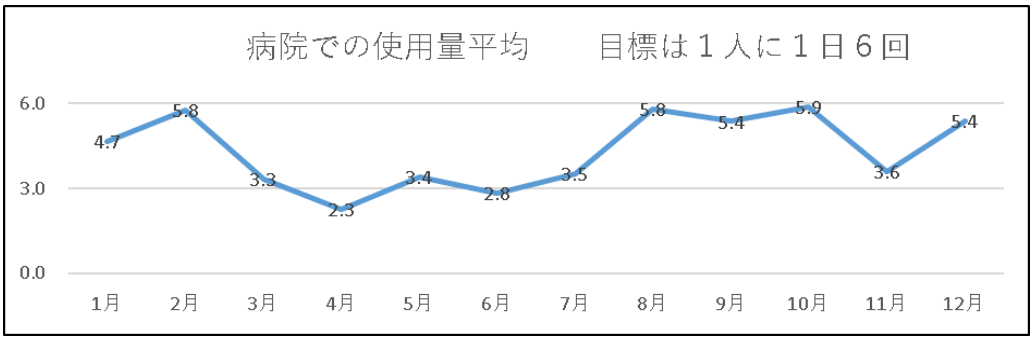
11. 院内感染部　　院内感染管理者　科長　山崎　朱美

院内感染とは、医療機関において患者が原疾患とは別に新たに罹患した感染症、医療従事者が医療機関内において感染した感染症のことです。
人から人、医療者を介して感染することもあれば、医療機器などを媒介にすることがあります。感染症は常に身近に存在するため、それぞれの症状や感染経路にあわせた対策が重要です。
また、感染対策の基本である手指衛生の遵守率や感染症の流行状況等を把握し、対策を強化することが求められています。

イ）　アルコール製手指消毒剤の使用量（1日1患者あたり）　※払い出しでの調査

【目的】
手指衛生遵守率を調査し、院内感染を防ぐ取り組みを行う

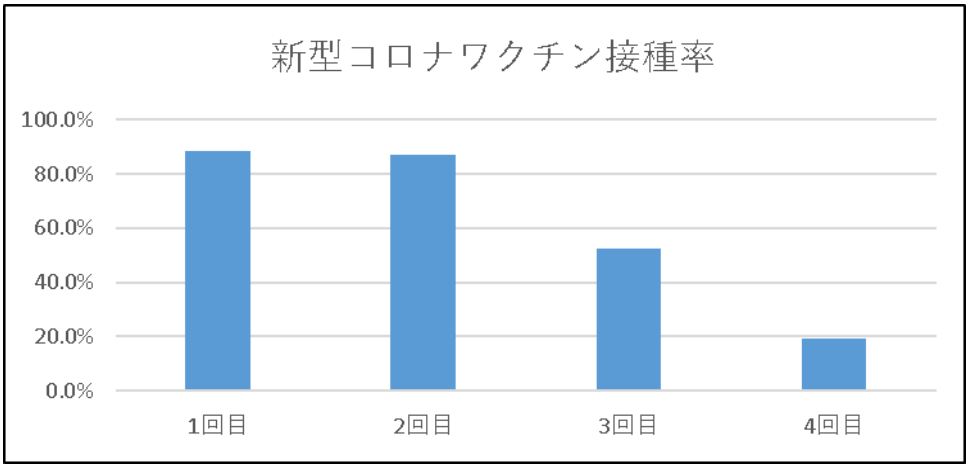




コメント
使用量はボトルの払い出し本数から手指衛生回数を算出し、それを期間の入院・外来のべ患者数で割る計算方法で算出している。介護保険分野については数ヶ月に1度まとめての払い出しされているため調査結果には含めていない。調査では「2階外来」での使用量が一番多い結果となった。（2階は薬剤科や各検査科等の使用も含まれる）病棟と比較し患者数・消毒用アルコールの設置台数が少ないことが影響している。各病棟を見ると大きな差は認められないが、新型コロナウイルスのクラスター発生や流行期には使用量が伸びた結果となった。手指消毒の重要性については年に2回の研修で説明を行なっているが、研修前後での使用量に変化はみられなかった。払い出しによる調査では、製剤の設置台数や患者数が結果に影響するため、より正確な調査を実施するためには、直接観察法や電子機器によるモニタリングの導入も検討したい。今後の手指消毒使用量の改善のための行動として、手指衛生を行える環境を整え、実施可能な複数の介入策の導入、定期的な介入の評価、評価結果の現場へのフィードバックといった一連のサイクルを継続的に実施する必要がある。

ロ） コロナワクチン接種状況

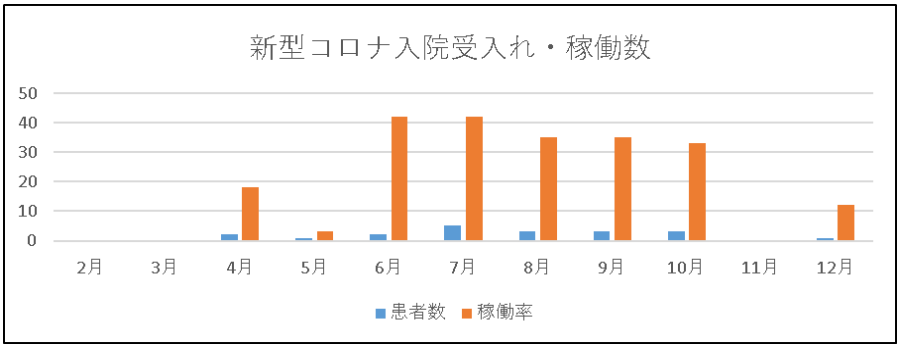
【目的】 ワクチン接種にかかる啓発および接種の在り方を検討するため



コメント
1・2回目の接種については全国の接種割合（80～81％）を超える結果となった。
3回目接種は全国の接種割合（68%）を下回る結果であったが、他院での接種が含まれていないためと考えられる。4回目以降は全国の接種割合が調査されていないため比較できない。

ハ） コロナ陽性者受入れ件数

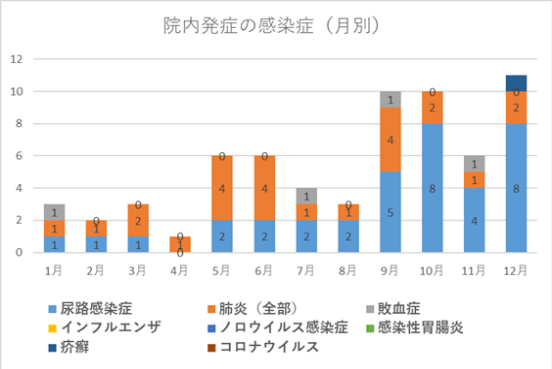
【目的】 病床の稼働状況を確認し継続的受入れのための準備を行う

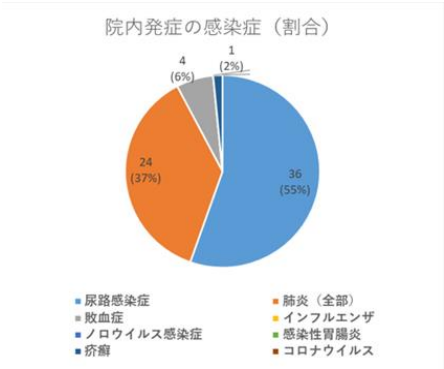


コメント
当院は2022年2月より新型コロナウイルス陽性患者を受け入れる「協力医療機関」として2床のベッドを確保している。保健所からの入院依頼により受け入れた患者は最大14日間の入院である。
患者が陽性になってから入院までに数日が経過していること、また、入院後の経過により在院日数が変わるため、患者受け入れ件数と稼働率は比例しない結果となった。
コロナウイルスの流行期（第６～８波）から外れた月は入院受入れが発生していないことから、軽症例の入院受入れに限っている当院においては流行期の徴候を捉え看護配置等の受け入れ態勢を強化することが必要である。

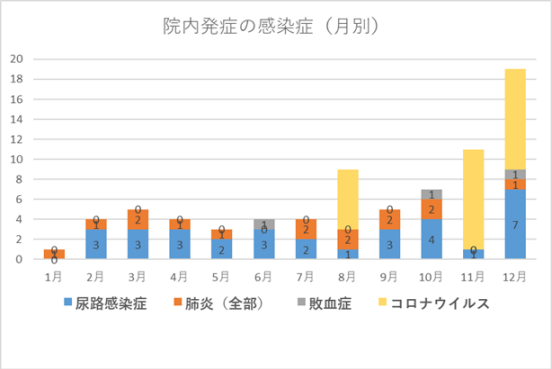
ニ） 院内感染発生状況（2021.1～2022.12）

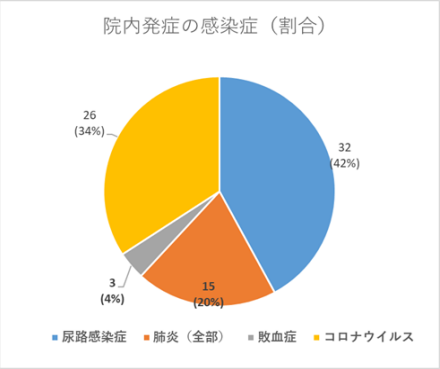
2021年1月～12月





2022年1月～12月





コメント

院内感染とは「入院後、原疾患とは別に発症した感染症」と定義されている。

2021年より肺炎（誤嚥性肺炎除く）、尿路感染症、敗血症など、院内発症の感染症について調査した。※感染症の再燃はカウントしていない。

複数ある感染症のうち、当院では尿路感染症と肺炎発症率が高いことが分かる。

2022年は病棟でのクラスター発生が相次いだ新型コロナウイスルス感染症が院内感染の3割を占めた。

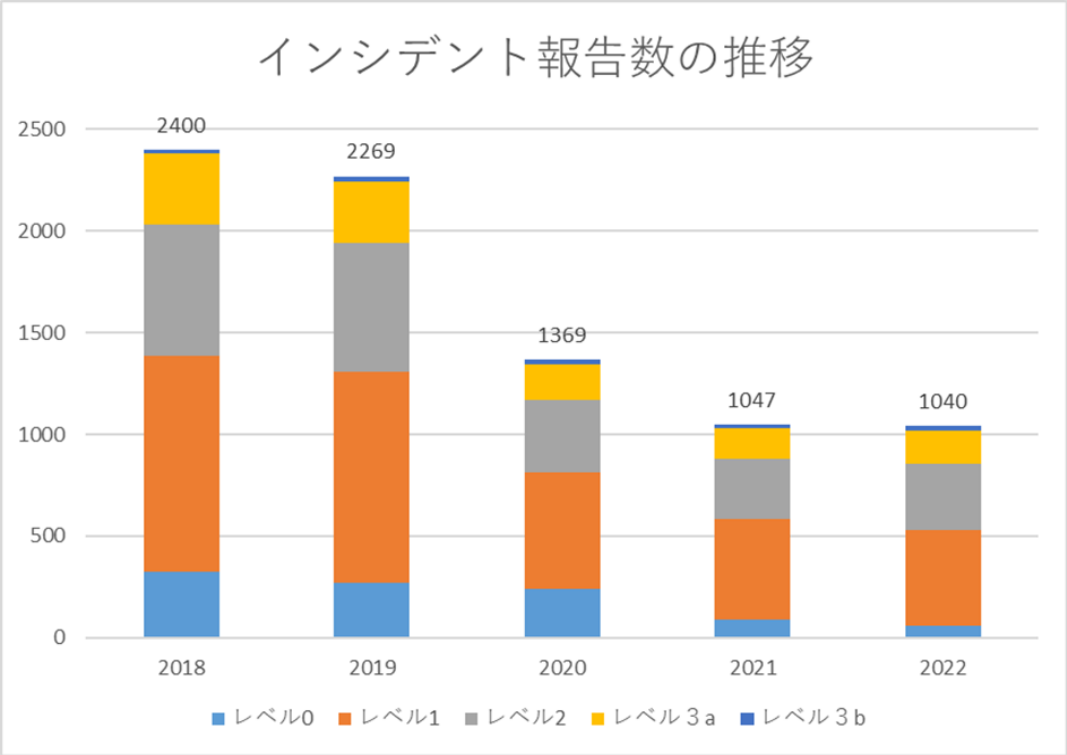
今後の対策として、尿路感染症を予防する取り組みや季節性の感染症流行期の**対策強化が必要である。**

12. 安全管理部　　安全管理者　科長　小川　真奈実

病院とは、病気になった方が治療や社会復帰を目指す施設であり、当然安全な場所でなければなりません。しかし、同時に感染症や、疾病による身体機能の低下から起こるケガ゛や、ヒューマンエラーによる事故のﾘｽｸもあり、そのことから目をそらしてはなりません。そこで、私達は日常業務の中にある「ヒヤリ」とした事や「ハッ！」としたことを次に活かすために報告し、それを集計して業務の中に潜む危険を見出し除去し、万一発生した場合には対策をすぐにとれる様対処・準備を行っています。

イ）　インシデントレポート報告数の推移

【目的】
安全活動への取り組み状況を評価する

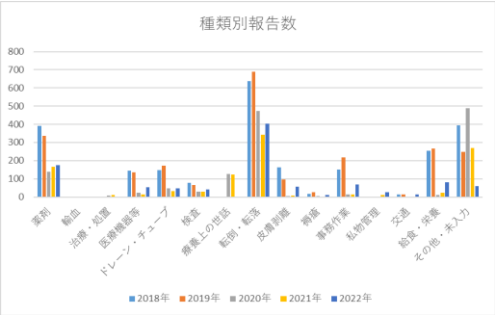


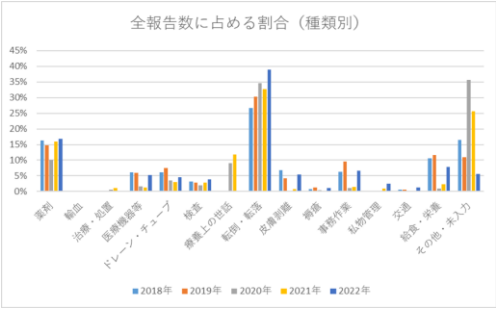
コメント
2020年2月よりインシデントレポートシステムが変更になり、報告数の減少が続いている。2020年以降、総報告数に占める各レベルの報告数を見ると、レベル0やレベル1での報告は年々減少しており、レベル2、レベル3とアクシデントレベルに近づくほど報告数は増えてきている。
インシデントレポートシステム変更後、レポート作成に時間や手間がかかるイメージが強く、事後報告となりやすいと考えられた。そのため、2021年11月にインシデントレポートの書式変更を行い、入力を行いやすくしたが、2022年も変化は見られなかった。インシデントレポートを元に、危険因子を早期に見つけ出し、アクシデントの発生を未然に防止していくためにはヒヤリハット報告が重要である。
その重要性を理解し、積極的に安全活動に取り組んでいけるよう、研修を行っていく。

ロ） 種類別分類

【目的】
どの様なインシデントが発生しているのかを分析し、
優先的に取り組むべき項目を把握する

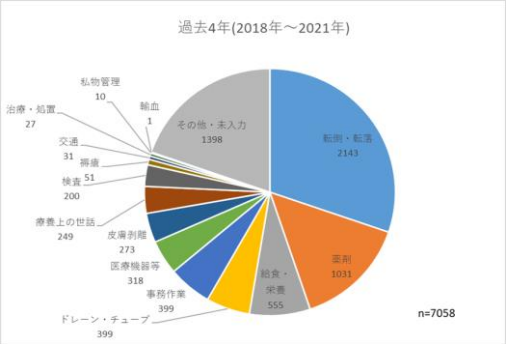
①種類別報告数の推移

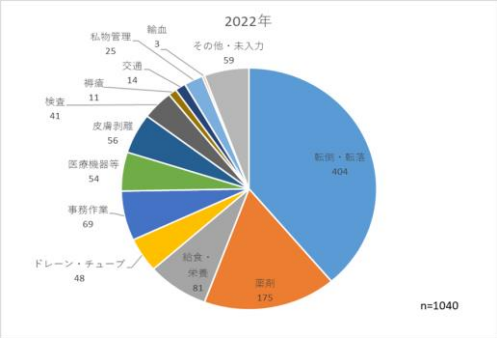




コメント
報告総数の減少と共に、各分類、報告数が減少してきているが、過去5年間継続して「転倒・転落」「薬剤」に関する報告が多い。中でも、「転倒・転落」が多く、報告数は減少しているが、全体に占める割合は増加傾向となっている。
2020年のインシデントレポートシステム変更時、「その他・未入力」に分類されるものが多くなり、2021年11月にインシデントレポートの書式変更を行った際、分類についても見直し、変更を行った。結果、2022年は「その他・未入力」に分類されるものは減少し、総報告数が減少する中で1件1件の報告を分析に反映させることができた。
効果的な対策に繋げられるよう取り組んでいく。

②種類別分類の比較

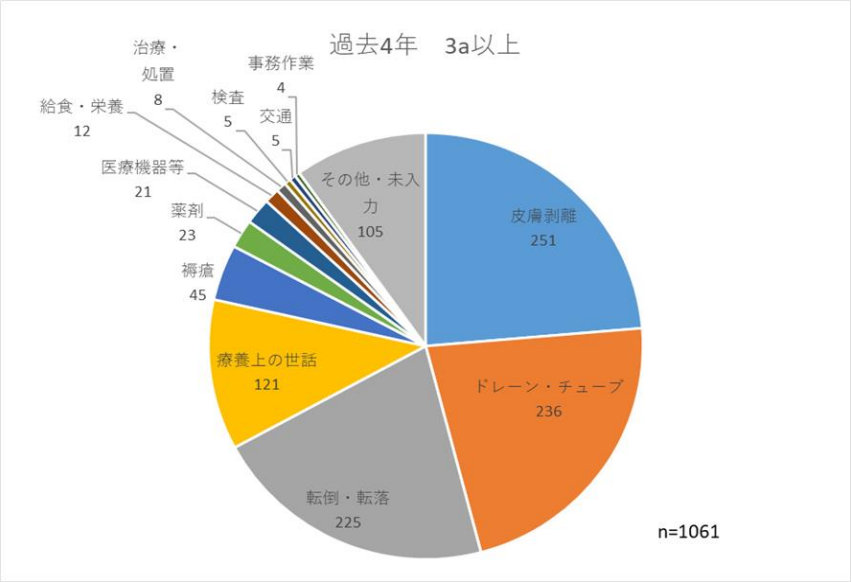


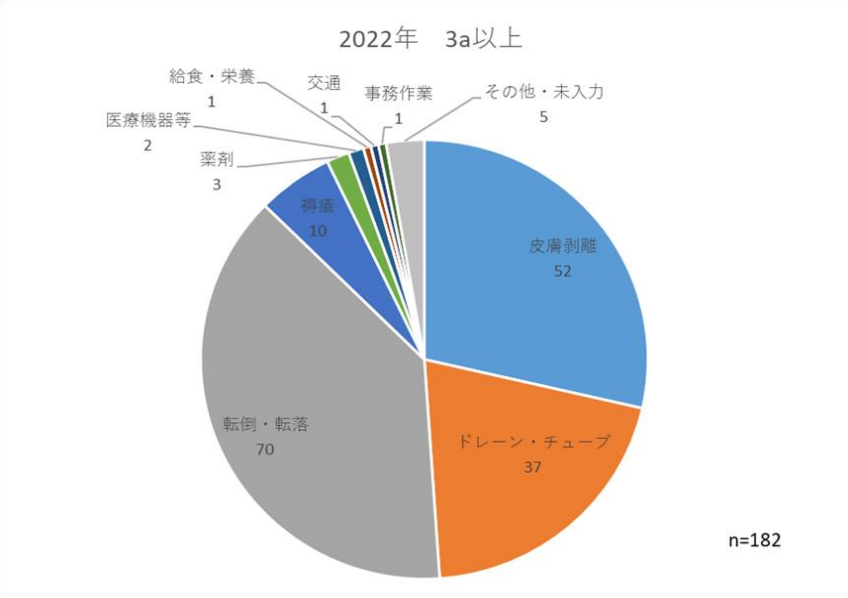


コメント
「①種類別報告数の推移」でも述べたが、「転倒・転落」「薬剤」は報告数は減少しているが、全体に占める割合は増加傾向となっており、2022年では2項目で半数以上を占める結果となった。これら2項目について、詳細分析を行い、特に対策を強化していく必要がある。

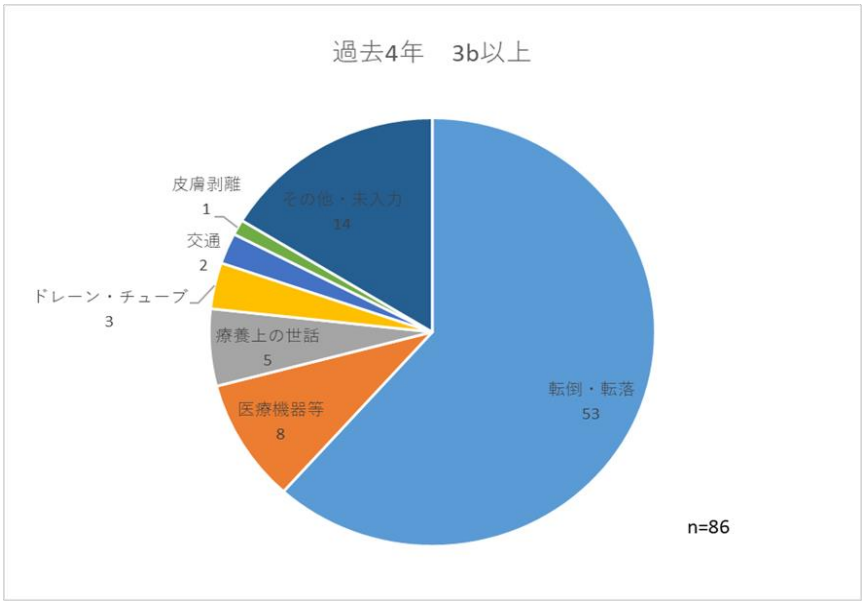
③アクシデントレベル比較

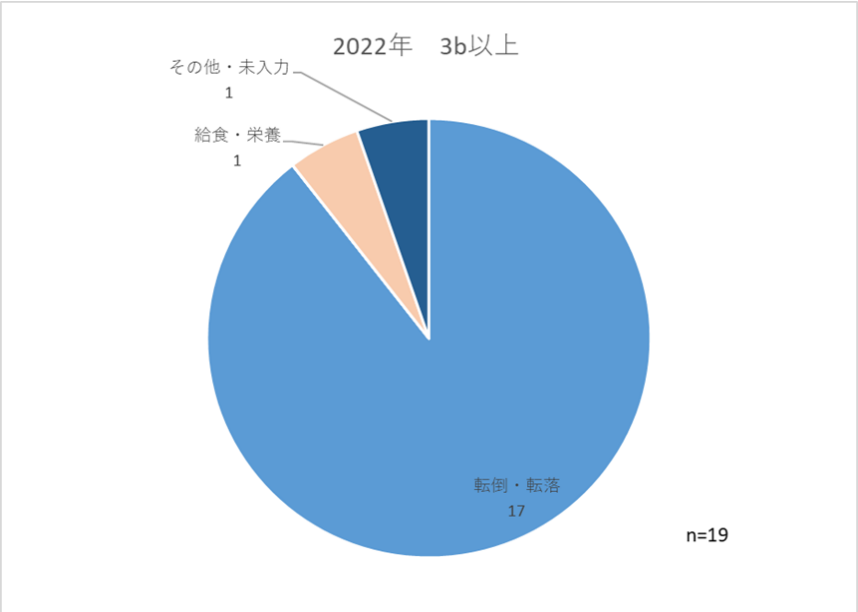
3aレベル以上





3bレベル以上





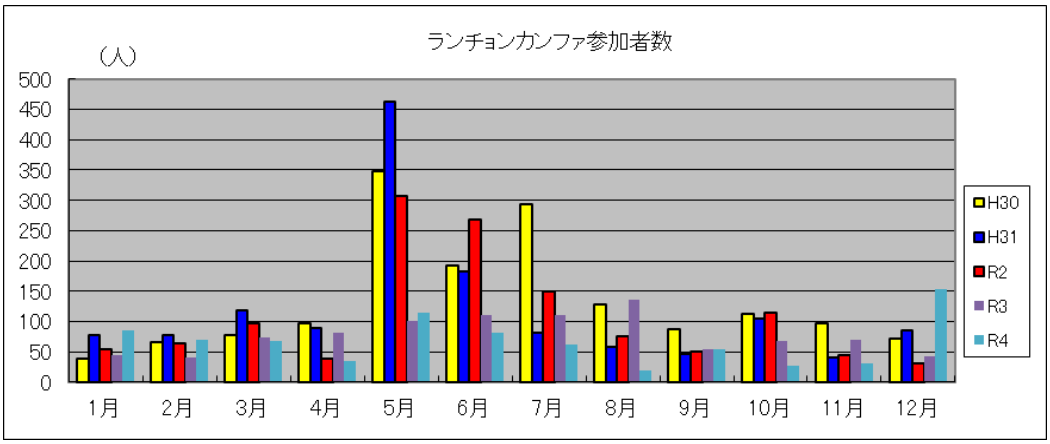
コメント
3aレベル以上のアクシデントに絞り、分類別にみると、過去4年では「皮膚剥離」や「ドレーン・チューブ」が多いが、2022年では「転倒・転落」が占める割合が大幅に増加している。また、3bレベル以上のアクシデントでは、2022年はほぼ「転倒・転落」によるものが占める。「①種類別報告数の推移」でも述べたが、「転倒・転落」は報告数は減少しているが、全体に占める割合は増加しており、その中でもヒヤリハットやインシデントレベルでの報告が減少し、アクシデントレベルでの報告が多くなっているといえる。インシデントレポートを元に、危険因子を早期に見つけ出し、アクシデントの発生を未然に防止していくためには、ヒヤリハット報告が重要である。その重要性について研修を行い、法人全体の意識改革に取り組んでいく。

13. 教育指導科

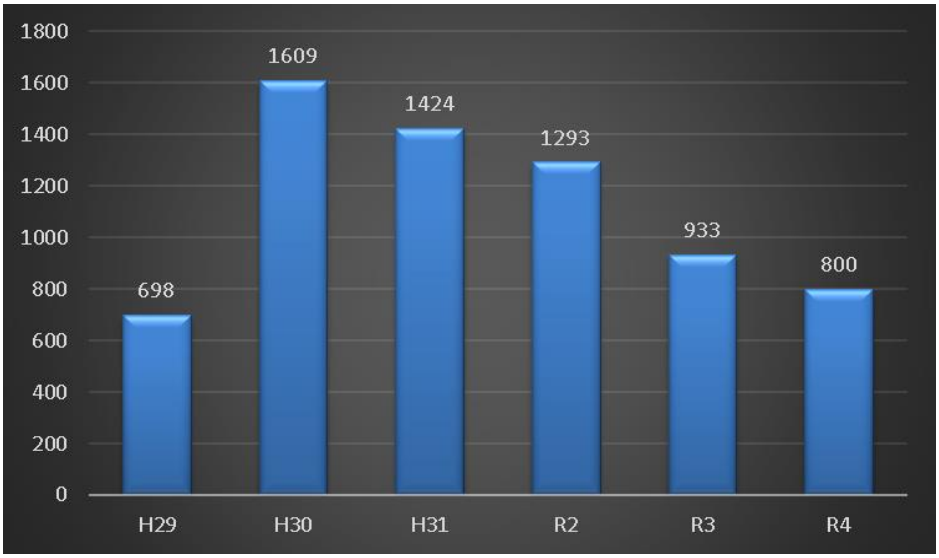
医療はﾁｰﾑで行うものであり、又、24時間365日継続して、そのｻｰﾋﾞｽは提供されなければなりません。ｻｰﾋﾞｽを常に一定水準以上のﾚﾍﾞﾙをもって提供するのは「人」です。よって常にその人材を人財にすべく学び勉め、育むように指導支援しています。

イ） ランチョンカンファ

【目的】
昼休みを有効活用し、自身の自己啓発につなげられているかを把握するため。



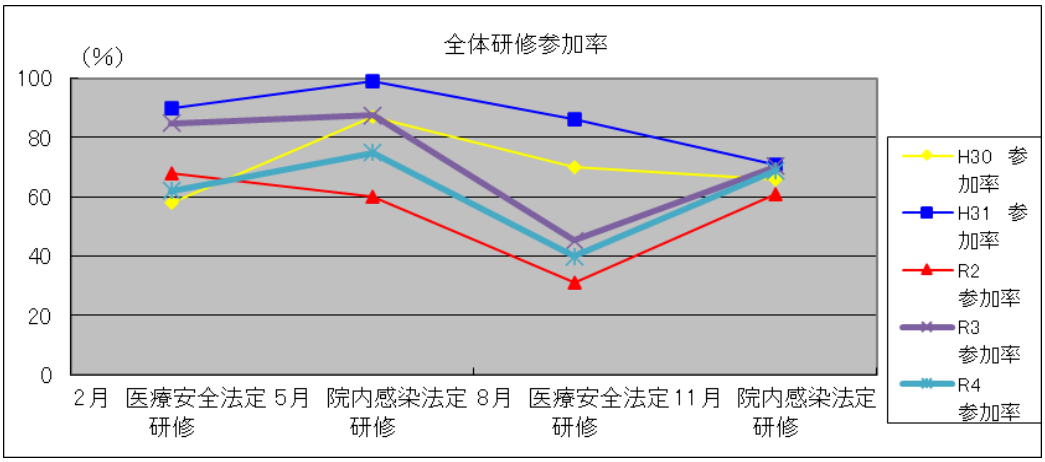
5年直近（ﾗﾝﾁｮﾝｶﾝﾌｧ参加率）



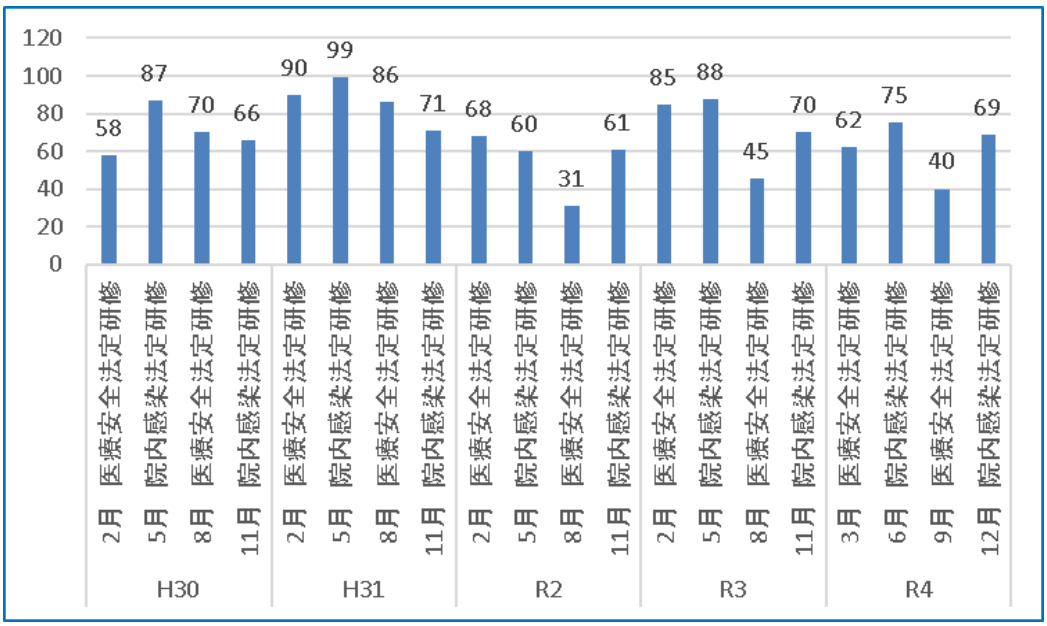
コメント
コロナによる院内感染対策のため、集合研修に制限を設けての実施となった。
研修数は例年に比べ減少となったが、e-ラーニング等を活用し最低水準の研修はできた。
医療従事者としての責務を全うするために、研修会を工夫しスキルUpを図っていく。

ロ） 全体研修参加率

【目的】
参加率100%が必要な法定研修会



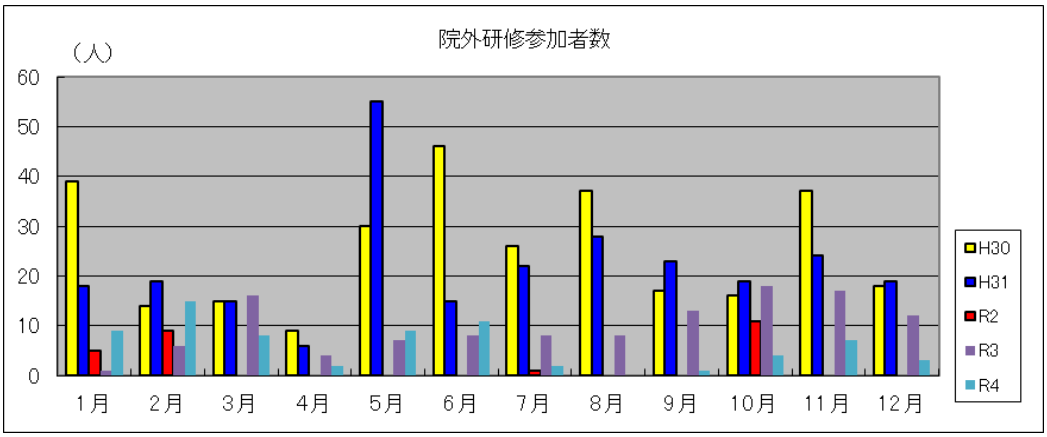
5年直近（全体研修）



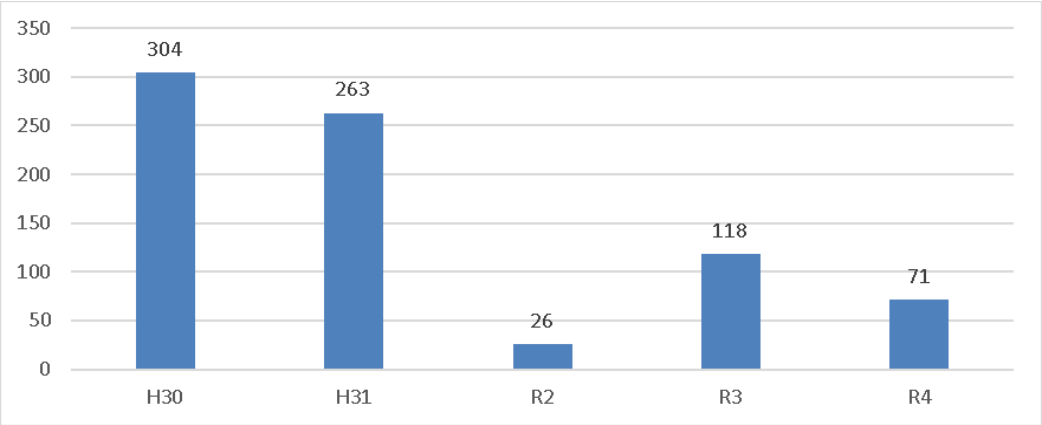
コメント
例年に比べ研修受講率が低下している。コロナ感染対策のため、集合研修をビデオ研修へ変更したことが参加率が低下した要因と考える
ビデオ視聴が簡単にできるようにし、法定研修参加100%を目指していく。

ハ） 院外研修

【目的】
キャスト自身がプライベートの時間を有効活用し、自己啓発に取り組んでいるかを把握するため



5年直近（院外研修）



コメント
院外研修の方法が集合研修からWEB研修等へ変化している。
キャストが参加しやすいWEB参加システムを構築していく。